
Fate/Another Magister

志暮春人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate/Another Magister

【Nコード】

N4591I

【作者名】

志暮春人

【あらすじ】

大きな回り道をしつつも答えを得た英雄は、役目を終えて眠りにつくはずだった。しかし眠る間も無く、気が付けば再び世界はあつて、しかも自分は何故か落ちていてー。

これはFate/stay nightと魔法先生ネギま！を主にしたクロスオーバー作品です。

プロローグ（前書き）

この作品は“基本的には” Fate/stay nightと魔法先生ネギま！をクロスさせた小説です。こういったものを忌避される方はご注意ください。

また、二次創作ゆえに原作とは違う点もありますが、そこはご容赦頂きたく存じます。

構わない方はご一読下されると幸いです。

11/1 表現がおかしいと思う点を修正しました。

11/13 アーチャーが令呪を確認する表現を修正しました。

英霊の災厄についての表現を追加しました。

プロローグ

「答えは得た。……大丈夫だよ遠坂。俺も、これから頑張っていくから」

眼前の少女に、万感の思いを込めて言葉を紡ぐ。

真っ直ぐな眼差しで此方を見上げる少女、たとえただの記録となってしまうとしても、その姿は胸に焼き付ける。

薄らと視界が霞み、四肢がさらさらと崩れるように消えていく。

少女は何か言ったのだろうか、それさえも分からないままに私の意識は暗転していった。

言葉では言い表せないモノが在る。

これを感じているのが体なのか、心なのか、何かも分からない。漂うような落ちているような、そんな感覚がしている。

元ある場所、記録としての己であり、英霊としての己の居場所である“座”へと至る時はいつもこの感覚がしていた。

記憶としてあるわけではなく、記録として知っているだけだが、どうにもこの感覚は好きになれなかった。

これからどうなるのか、どうするのか。分かっている事といえば、再び守護者として呼ばれ、守る為なんて理由で飾っただけの、汚点を見せ付けられる日々が続く事だけだ。

ただ、不思議と絶望は無い。それは、最後にもらえた暖かいものがそうさせるのだろう。

— l a c —

何か聞こえた気がした、声？

五感が五感として成り立たず、定義なんて曖昧な此处で、声だと感じられたのは何故だ？

— l a l a c —

やはり、声がする。

はつきりとした意味の掴めないそれは、しかし座へと戻るはずの私を引き止める。

何だ？

— l i l l a c —

声は止まず、引きとめる力は変化し、逆に引かれる力として働く。それと同時に、引かれる先から光が差ししてくる。

あれは——またどこかに召還される？ まだ座に至ってもいないのに！？

—。

声は何かを朗々と呟き続けるが、意味として捉えられない。しかし、言葉が進むことに引く力は強くなる。

—駄目だな。

朗々とした声が止まり、漸く意味のある言葉が聞こえる。しかし、声ににじむ感情は芳しいものではないようだ。

——じじいが寄越したから何かと思えば…失敗作の魔方陣じゃないか。いくぞ茶々丸、見回りだ

その言葉を最後に、ぶつんと声が途絶える。

すると……引く力が捻れた。差し込む光は強さを増し、此方を包まんと輝き始める。

そのまま、何も出来ないままに光に飲み込まれた——。

冬、というものをこの身となって何度過ごしたか。そんな些細な

事にも考えを巡らせてしまっぐらい、私は暇だった。

今日は珍しく、暇つぶしになるような物があつたのだが、それも先程徒労に終わった。

気分転換がてらに日課の夜の見回りだが、もう十数年も繰り返していれば、そして、いままで大きな異常も無ければ、これといった事件も起きておらず、退屈しのぎの散歩にもなりはしない。

そういう訳でこの私、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは今日も退屈を持て余していた。

「まったく、あのじじいめ……」

「？ いかがしました、マスター？」

「いや……さっき試した魔方陣だが、結局失敗だったなと思ってな」
「そうですか」

私に話しかけてきた茶々丸も、他愛ない話題だと分かったのか、相槌一つで口を閉じる。

退屈しのぎに話題を広げてくれればよいが、人ならざる者である茶々丸にそれを求めるのはお門違いだろうか。人外という点では私も人の事は言えないが。

アンドロイド……ハカセが言うにはガイノイドだったか？ と吸血鬼である私だ、普通に考えれば妙な組み合わせで話題には困らないとは思うのにな。

「まあ、成功した所でどのような効果があるか分からんし、構わんが」

「何か危険な事が起きる可能性もありました」

「む……」

話題は広げてくれないのに、事実や必要と思われる事は答える。人工知能だけでなく魔法の力も合わさっているとは言え、まだ生ま

れて間もないのだ、融通を求めるのは酷と言うものだろう。日々学び、いつか気の効いたギャグでも言ってもらおう。それはそれで面白いかも知れん。

「……まあいい。さて、今日も異常無しだ、帰るか」
「はい、マスター」

退屈な休みだったが、明日から新しい月が始まる。多少はマシになればよいが……なんてことを考えつつ、来た道を引き返す。

家までの距離はそう遠くない。見回りとはいっても、学園都市に張られた結界がある以上、何かが進入すればそれで分かるし、気配探知でもすればそれで見回りは事足りるからだ。

「帰りにサツキの所にでも——む!？」

後ろを歩く茶々丸へと振り向いた所で、結界に侵入する何かを捉えた——。

光に飲み込まれたかと思うと、次の瞬間には五感も意識もはつきりしていた。

何故それが分かったか、などという事は一目瞭然だ。

今、視覚には夜空と星が映り、聴覚には風を切る音が聞こえ、触覚では体全体に風圧を感じ、嗅覚には微かな緑と空の湿っぽい香りを感じている。味覚にはこれといった反応は無いが、この場では必要ではないし省略だ。

そして何より、意識には現在の私の状況がこれ以上ないぐらいにはつきりと理解できているからだ。端的に言えば“落ちている”と。

「——くっ、何なんだ一体!？」

以前、私を喚んだ彼女の“らしさ”を彷彿とさせる状況に理不尽さと、現状が見えない事への若干の焦りを感じつつ、身体の解析・確認を優先して魔力を通す。

身体損傷、なし。魔術回路、異常なし。魔力量、異常なし。魔力供給、なし。

「何？」

魔力量は十分なのに供給が無いだ!？ 慌てて周りを見渡すが、マスターらしき存在と一緒に落ちていることは無かった。そもそも繋がりを感じないのに存在するはずが無い。

という事は聖杯戦争ではない? しかし、喚ばれた先程から災厄の類や兆候は感じられないが…私が喚ばれたというのに、守護者としての責務が無い?

「どういう——む？」

と、唐突に景色が変わる。一面空だった視界の端に、木の先端が映りこむ。これは……不味い、地面が近い!？

「間に合うかつ!？」

咄嗟に体中に強化をかけると、衝撃を和らげる物のイメージを浮かんだそのままに投影する。

次の瞬間、弱くない衝撃が全身を駆け抜けた——。

「ええい、人間の身体とは何て不便な！」

「正確には人間レベルの身体能力です、マスター」

「冷静に突っ込んでいる場合か!？」

走っているせいで息切れしているにも関わらず茶々丸へと突っ込んでしまうのは、性だろうか。

にしてもまた、妙な所でボケた発言をする！ 他愛ない話でもそういう反応をすればよいものを… 見えた！

「熱源感知。一階居間に人型の反応があります」

「ああ。… 隠しているのか分かりづらいが、桁外れの魔力の持ち主だな」

全盛期の私や、かの紅き翼——魔法界で英雄とされる一派の面々に勝るとも劣らないレベルだ、そんな存在が居れば狭い魔法界だ、耳に届いているだろう。

そんな存在は聞いた事もないし、かといって既存の、紅き翼の面々とは気配がまったく違う。何処までも静かでいて、なのに力強い意志を感じさせるそれは、既知のどの人物とも合致しない。

「いかなさいます、マスター？」

「敵意や害意といったものは感じられんが… 油断は出来ん、お前はじじいに連絡出来るようにしつつ援護しろ、突入するぞ。ククツ、人の家に、ましてこの私の家に勝手に上がりこむなど、いい度胸ではないか」

「… もしかして、楽しんでいますか？」

「否定はせん。行くぞ！」

まさに暇を持余していたところに、お誂え向きに飛び込んできたのだ。少しは期待してしまうのも仕方ないだろう？

とはいえ、油断は出来ない。見知らぬ上に力は強大なんて馬鹿げているが、同時に危険な存在である可能性もある。

大方、此方の存在も向こうには察知されているだろう、ならば、先手をとってこちらがイニシアチブを取る。無害な存在ならば遊ぶ、危険な存在ならば何とか消去する、それで問題は無い。

「――！」

扉を蹴破る勢いで家の中へ飛び込むと、一気に居間へと駆け込む。

「――な！？」

そこには、ぐちゃぐちゃに壊され、散らかされた居間と、半ば原形をとどめていないソファアの上で、赤い外套を身に纏った男がふんぞり返っていた――。

プロローグ（後書き）

如何でしたでしょうか。乱筆乱文にて失礼致しましたが、楽しんでいただけると幸いです。

この後の展開ですが、『ネギま!』のストーリーを辿っていく程度しか考えておりません。ですので、“基本的には”と書きました通り、例外があるかも知れません。

尚、ご意見ご感想はありがたく頂戴いたします、ついでにアーチャーの投影武器案等も下さるとありがたいです。

出会いは…（前書き）

お待たせ致しました、『Fate/Another Magister』第二話をお送りします。

11/13 アーチャーと令呪の有無についての表現を修正しました。

出会いは…

咄嗟の事で成功するかは分からなかったが、こうして無事でいる事を鑑みるに、投影は成功したらしい。体の下でクッションのようなものが碎けて消えていくのが分かった。さらには、崩壊寸前までボロボロになってはいるが、ソファアの上に乘ったらしく、それも無事である事の一因だと理解できた。

ここは何処だろうか。見回した所、落ちた衝撃で天井には穴が開き、辺りには建材や家具、小物が散乱しているものの、それがどこかの家の一室である事が伺える。家主が居れば大惨事だろうが、幸い留守にしていたのか、無人のようだ。

「……」

とりあえず、これ以上飛ばされたり落ちたりといった事は無さそうだ。落착いて現状把握に努められる。

まず、私自身の内面の状態はどうだろうか？ “座”へと戻されていないためか記憶はそのままある、大切な少女の事も、もう一人の私の原点との事も、そして…得られた答えの事も。これは重畳、前回のよう荒っぽい召喚ゆえ危惧したが、記憶の欠損は見られないようだ。一般的に良い事かは知った事ではないが。

では肉体的にはどうか。先程の解析により状態は確認済みだが、魔力についてはどういう事だろうか？ 投影分の魔力の消費は微量ながらあるが、現界しているにも拘らず魔力は消費していない。という事は、霊体化するとうなる？

「何だと!？」

思わず声が出てしまった。

霊体化は出来た。しかしおかしい、変化の際微かだが平時には無い魔力の消費を感じた。しかも、それは霊体化を維持している毎に消費され続けている。

仕方が無い、魔力の回復手段が分からない以上、霊体化は避けるべきか。

「どういう事だ…？」

霊体化を解きながら考える。普通、魔力の消費が少ない為に霊体化するはずが、現界している方が魔力を消費しないなんて、そんな事が有り得るのだろうか？

まるで、受肉していて、体がある事が普通のような…。

——まさか、そういう事か？

肉体があることが普通であり、霊体となる事が異常である。そう考えると現界していても霊力を消費しない事、逆に霊体となると魔力を消費する事にまだ説明が付く。

マスターの不在に対してもそうだ。従えられて魔力供給を受ける身ならば兎も角、自立で動ける存在であり、マスターを必要としないのならば居ないのも頷ける。

「…む？」

では何故召喚されたのか…それが疑問ではあったが、その疑問に思考が至る前に、ふと外に気配が沸く。微かに魔力を感じさせるそれは、果たして敵か？——まあ、普通に考えて家主だろう。

申し訳無い事をしてしまったなと思わなくも無いが、果たしてこれは自分のせいかと言われれば、それは否定できる。“座”へと戻る寸前、何者かに引つ張られ、召喚されたのは間違いないのだから。

そう考えると、もしかしてこの家主が私を喚び出したのだろうか？

「——な！？」

眼前の扉が勢いよく開かれる。そこには、波打つ金髪の美しい、小柄な少女がいた。呆然とした様相を呈しながらも、部屋を見渡す眼差しは青く、ともすれば氷のような寒々しさを感じさせそうだ。後ろには綺麗ながらどこか無機質な印象を感じさせる少女が控えており、彼女は違う事無く此方を真っ直ぐと見つめている。

どうやら、感じた魔力の元はこの少女達らしい。

「な、な、な……何だ貴様はー！？」

暫しは部屋の惨状に呆然としていたようだが、俄かに目が合うや否や、金髪の少女は怒鳴ってきた。しかも、内容が内容なだけに、前回喚ばれた時の記憶が甦る。彼女は今どうしているだろうかなんて考えるのは、今は余分だろうか。

とは言え、普通に考えれば彼女がこの家の主であろうし、気持ちも分からなくはない。しかし、召喚したのが彼女であろう事は何となく分かる。前回のように多少の差異はあれ、召喚された場所が場所だからな。だから——そうだな、ならば言うべき言葉は決まっている。とは言えマスターではない以上、少し捻ったものだが。

「…開口一番それが。まったく、とんでもない所に喚ばれたものだ」

おや、少女が固まってしまった。と、見る見る顔に赤色が増してくる。これは表情を見るに…ふむ、怒りだろうな。らしくもない悪戯心を発揮してしまったが…ここまで素直に反応してくれるとは、少々予想外だ。

しかし、すぐさま飛び掛ってくる様子が無いところを見ると、意

外に冷静な人物であるようだ。面白い、もう少しついてみようか？

「――」

「反応なしか、これは貧乏くじを引いたかな…？」

貧乏くじ、という言葉を出した瞬間、さっと顔色が変わる。段々と赤に染まっていた表情が、一気に朱を差した。分かりやすい、まるで蒸気の吹く音が聞こえてきそうだ。

「びんぼ…ほ、ほう、この私に向かってよくそんな口が聞けるな。相当の身の程知らずと見える…状況が分かっているのか？」

「それはこちらが聞きたいな。君が私を喚んだのではないのかね？何分、乱暴な召喚続きでね、状況が掴めていないのだ」

「貴様！……いや待て、召喚だと？」

思い当たる所があったのか、それまでの赤ら顔と激情は鳴りを潜めると、一転して神妙な顔つきとなる。さて、まったくの無知や思い当たる節の無い者ならばまさに貧乏くじだったが、これで少しは状況が把握できるだろうか。

まあ、いくら召還主とは言え主従契約を結ぶ気など無いし、その強制力も感じないのだが。

「思い当たる節があったのかね？　それは何よりだ。できれば説明して貰いたいのだがな」

「……ちよつと待っている」

少女は一瞬顔を顰めるも、頷いて部屋を出て行く。答えがもらえていないのだが、どうなる事やら…先が思い遣られるな。

しかし、それは杞憂に終わったようで、程なくして少女は妙な包みを持って戻ってきた。くすんだ紫色の布で包まれたそれから少

女のものだろうか、微かに残留している魔力を感じられた。

「…貴様、召喚されたといったな？　では、これに見覚えがあるか？」

若干の困惑を瞳に浮かべつつ、少女は包みを差し出す。

この中身が状況を説明してくれるとしても言うのだろうか。見た目といい、微細な魔力といい、胡散臭さを感じこそすれ、信じるには値しない気もするが。

ともあれ、開けないわけにも行くまい。包みを解くと、中からは一本の紙筒と、赤い宝石が――

「な…！？」

「ほう、やはり見覚えがあるか」

少女が何か言っただけで頷いているが、それは耳に入らない。私は出てきたものに目を奪われて、思わず立ち上がった。いた。

赤い宝石――かつての主が持っていたもので、私との縁を示すもの。そして――衛宮士郎が生涯に亘って持ち続けたものが目の前にあった。

「馬鹿な…こんなものが何故こんな所に！？」

慌てて紙筒を開く。それは長年の劣化を感じさせるものの崩れる事はない、描かれた文字ははっきりとしていて、見覚えのある魔方阵を模っていた。

嘗ての主の家の地下、私が喚ばれる際に用いられた、床に描かれていた魔方阵と同じ形だ。

「……これを何処で手に入れた？」

ここで漸く少女へと向き直る。先程までの言動はどこへやら、私の反応が面白いとでも言うのだろうか。ニヤニヤと笑みを浮かべていたが隠す気は無いらしく、素直に答えてくれる。

「じじいが図書館島で見つけた物らしいぞ？ 詳しくは知らんがな」

じじい？ 図書館島？

思い当たる単語が無い。じじいというのはマキリの老人の事だろうか？ では図書館島とは？ 冬木の地にそんな地名があっただろうか？

……いかん。自分でも混乱しているという事が分かる。そもそもここは何処か、彼女達は誰か、聖杯戦争なり世界の危機なりが起きているのか、そんな基本的な事を失念していた。

「……良く分からんな。ここは冬木のどの辺りだ？」

「ふゆき……？ 何を言っている？ ここは麻帆良学園都市だろうか」

まほら……聞いた事がない地名だ。さては市外という事か？ しかし、学園都市と言うぐらいなら珍しいので聞いた事もありそうなものだが……。

「おい貴様、ふゆきというのは何だ？」

「……地名だ。季節の冬に草木の木、冬木市だ」

「冬木市か……おい茶々丸、そんな地名あったか？」

私の説明に少女は眉を顰めると、それまで一言も発していなかった後ろの少女に話しかける。ちゃちゃまる、と言ったか？

妙な名前だが……む？ あの後ろの少女、本当に人間か？

そつえば失念していたが、目の前の少女もその後ろの少女も、

只者ではない、人外のような気配だ。特に後ろの少女、表情は乏しく生気が感じられないし…大体、あの耳らしきものは何だ？

「…検索ワードを『冬木市』及び『冬木』で検索しましたが、該当する地名はありませんでした」

「何？」

注目していた少女からの予想外の返事に戸惑う。数秒黙っていただけで何故そんな事がわかる？

「ふん、やはりか。聞いた事の無い地名だったが案の定だ。お前の事だ、インターネットだけでなくGPS情報も調べただろう？」

「はい。似た地名はいくつかありましたが、冬木市という地名に合致する情報はありませんでした」

そんな馬鹿な、“座”に戻る前に召喚されたのだ、同じ場所ではないのか？ 或いはもしかして、時代が前後して市名が変わったとも言っのだろうか？ それにしては部屋の内装品も小物も見た事があるようなデザインのものであり、時代的には冬木の町で見る物とそう変わらないように見える。

いや待て、魔力行使はおろか、なんの動作もせずに情報をやる取りできるとなると、やはり時代が違っているのだろうか？

金髪少女は兎も角、背後の女性性は魔力を行使せず、何か動作を行う事も無く情報を手に入れていた。漫画にでもありそうな頭の中に機械でも埋め込んでいるのではないかという、一見下らない思考が頭を過ぎる。

しかし思えば、私にはそれを否定するだけの理解が無い。少なくとも現状は。

「……良く分かんが、まあいい。で？」

それつきり黙りこんでいた私を見かねたのか、金髪の少女が話を切り上げて問いかけてくる。

此方は混乱している上に謎がどんどん積み重なる訳だが、さらに増長させようとも言っのだらうか？

「…で、とは？」

「だから、お前は何者かと言う話だ！ 最初に言っただらう！」

そこで怒られても…困惑しか浮かばないわけだが？

まあいい、話が進まないのなら名乗るのも吝かではない。しかし…

「人の名を尋ねる前に、君達こそ何者なんだ？ 言っただらう、私は状況が掴めていないとな」

「む…」

これは、焦りに任せて些か言い過ぎただらうか。

少女達からすれば自分達の場所に侵入した私が不審人物であり、本来ならば名乗るのはこちらからと言うのは道理だ。しかし、不透明な状況で簡単に情報を提供するのはどうにも気が引ける。

とはいえ…少しは譲歩するべきか。

今までの私からすれば甘いが…さて、彼女の影響かあの愚直なお人よしの影響か、少しは丸くなってしまったらしいな。

「無礼は承知だ、本来ならば此方が名乗るべきなのだらう。しかし考えてみてくれ、君達ならば見ず知らずの地、理解の出来ない状況で容易に素性を明かせるかね？」

「…ふん、一理あるな」

渋々ながら頷いた少女、助かる事に話の分かる人物のようだ。

「良かるう。私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。こいつは絡繰茶々丸。素性は…まあ、貴様と似た類だと言っておこうか」

やはり、私が彼女達の魔力に気付いたように、彼女達も私の魔力に気付いているようだ。一つ明らかになったが進展とは言えないな、より注意が必要と言うことぐらいだろうか。

しかし二人とも、素直に名前を教えてくれる辺り、そう悪くない人物らしい。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルに絡繰茶々丸か…」

「フルネームでは長いだろう、好きに呼ぶがいい」

「そうか…良いのか？」

「構わん。茶々丸、お前も構わないだろう」

「ご随意に」

「ふむ…では、エヴァに茶々丸と。ああ、この響きは実に君達に似合っている」

「な…」

「…ありがとうございます」

虚を突かれた表情で一瞬黙る金髪の少女——いやエヴァ、同じく一瞬黙るものの、次には礼を言って頭を下げる茶々丸。対照的な印象を受ける反応だが、興味深い。

薄らと染まった頬を段々と笑みの形に変えるエヴァ。そんな面白い事を言っただけは無いのだから？

「ふ、ふふ…はははは！面白い事を言う、そんな事を言われたのは初めてだよ！」

「そうかね？」

「ああ、くつくつつ…すまん、壺にククツ…ふふ………はあ…久しぶりにここまで笑ったな。それで、お前の名は？」

まあ、気に入ったのならば何よりだが…さて、何処まで名乗るべきか。いや、愚直なお人よしと同じ名は名乗れまい。元は同じとは言え、彼の者と私は最早別の存在だ。私はエミヤシロウであつても衛宮士郎ではない。

となると、名乗れるのはクラス名だけか？

しかし、名を交換すると言つのは重要だ。自分の口から名乗り、相手の口から聞くことで初めて呼び合えるものである。まして、無礼にも拘らず名乗ってくれた彼女に対して、私の呼び方に笑った彼女に対して、応えてやりたいと思う。

……つくづく、甘くなつたものだ。だが……なるほど、悪い。い。

「…アーチャーだ。名はエミヤシロウと言つが、アーチャーと呼んで貰いたい」

「^{アーチャー}弓射る者」？ ふむ、見た目からすると「^{セイバー}騎士」とでも言つべきではないか？」

「む…悪かつたな、セイバーでは無くて」

「ん？ 何だ？」

「…いや、何でもない」

かつての主といい、この少女——エヴァといい、セイバーにばかり拘るのはどうにも気に食わんな。

ああ、どうせアーチャーでは派手さに欠けるだろうよ。

「？ まあいい、何故名前で呼ばれる事を避ける？」

「それは…済まないが、話せないし、話した所で理解出来ないだろう。それにアーチャーと言う呼び名は存外気に入っているのだな」

「ふむ、そうか…良からう、嘘はついていないようだしな。それで…何故こんなところに居る？」

「…それは君達を知る事だと思うが？ 私としてはいきなり喚ばれただけでな。理解している事と言えば、私自身の事と、見知らぬ地なのに何故か私に縁の物があつた事だけだ」

「！ な、なるほどな…言えん、気まぐれだったなどとは「何だ？」

「ななつ、何でもないぞ！ え、縁とはこれか？」

「む？ …ああ。どういう訳か知らないが、この宝石は私が過去に貰ったもので、この魔方阵はかつて私が喚ばれた時に使用されたものの複写のようだ」

一瞬間が引きつったようだが、何か気まずい事でもあつただろうか？

何か呟いていたようだが、流石に強化を施していない上に聴力には視力と違って自信が無い、聞き逃してしまったが良かったのだろうか。

まあ、エヴァが気にしていないならば構わないか。私としてはそれよりも宝石に興味がある。

「では、宝石は渡したままでよからうが、紙筒は返してくれ」「そうだな。礼を言う」

ありがたい事に宝石は譲ってもらえるようだ。よくよく、この宝石とは縁が深いということを思い知らされるな。

「それで、召喚された理由だが、不明——」

「——マスターの気まぐれです」

「——な！？ おい茶々丸！？」

「…何だと？」

受身を保って沈黙していた無機質な印象の少女―茶々丸が自発的に口を開く。

その内容に慌てふためくエヴァだが、私にはその行為よりも、行為に付随する結果が気になった。

「エヴァ、君は気まぐれに召喚して私を呼び出したと言うのか!？」

「な、そ、そう怒る事でもないだろう…私は失敗だ」と――

「そんな事は二の次だ。事実を教えてくれ」

「…そ、そうだ」

「馬鹿な…」

頷くエヴァに、鈍い、頭痛のような感覚が走る。

いくら縁があるものとは言え、本来ならばそうそう簡単に英霊であるこの身を召喚する事は出来ない。いくつかの条件が重なって初めて召喚出来るものであり、気軽に喚べるレベルではない。

今回はイレギュラーな召喚だから違うという事だろうか。聖杯は破壊したので関係ないだろうし、頷く理由にはならないだろう。

全く訳が分からない。

「お、おいアーチャー？ どうしたんだ？ その、怒るのは分かるが…」

「…ああ、いや、済まない。それは構わないが、一つ聞いてもいいかね？」

「な、何だ？」

「君は一体何者なんだ？ 多少魔力はあるらしいが、微々たる物だろう。にも関わらず英霊たる私を気軽に召喚できるなど信じられん」

――信じられないが、何か特別な存在なのではないか？

少しの表情の変化も見逃すまいと、エヴァを見る。すると、エヴァも何か引つ掛かる点があつたらしく、こちらを鋭い眼差しで見つめてきた。

「…お前、英霊と言つたな？ 英霊と言えば…人の身でありながら、高位存在へと昇華された者を指す言葉だが、お前がそうだというのか？」

「…ああ、そうだ」

墓穴を掘る、と言うのはこういう事を言うのだろうか。エヴァの素性を聞くつもりが、逆に自分の素性を明かしてしまうとは。

「成る程な…英霊か。それならばその魔力量に説明が付く。アーチヤーの名も納得だ、普通、英霊になつてまで生前の名は使わないだろうしな」

そういう訳ではないのだがな、まあいい。それよりも問題はエヴァの存在だ。

私が素性を明かした事の引き換えに、何とか聞き出せないものだろうか。

「それでエヴァ、君は…？」

「…ああ。いいだろう、フェアに話すのも悪くない。そうだな…真祖・デイトウウォーカーの吸血姫と言えは分かるか？」

「…な、真祖だと!？」

「いかにも。ああ、鬼じゃなくて姫だぞ？」

明かされた驚愕の事実、思わず仰け反りそうになる。

真祖だと？ 確かに人外の者だとは思っていたが、まさか真祖の吸血鬼だとは！

「吸血鬼じゃなくて吸血姫だからな！」

エヴァが何か言っているが、今は無視させてもらおう。

しかしおかしい、仮に真祖だとして、この微量の魔力は何だ？

本来の真祖は言うに及ばず、普通の魔術師とそう変わらないレベルではないか。

魔力を隠しているにしても低いだろうし、そもそもそんな素振りはない。

「冗談だろう…信じられん。魔術師と同程度だと？」

「ふん、封印と結界のせいで魔力が減っているだけだ！ 本来ならばそこいらの魔法使いなど比べるべくも無いわ」

「魔法使いとだと！？ 馬鹿な、魔術師でさえ世界でもごく少数と言うのに、何を…」

「お前こそ何を言っている？ ここは魔法使い達が集まり、学ぶ場所だぞ？」

「…む？」

「…ん？」

そこでふと気が付く。どうにも話が噛み合っていない。具体的に、魔術師と魔法使いの認識に差があると思うのだが、私だけだろうか？

「何かおかしいと思うのだが…お前はと思う？」

「ああ、肯定だ。君もか？」

やはり、と二人して顔を見合わせる。どうやら、根本的な所でお互いに勘違いをしているようだ。

と――

「マスター」

唐突に茶々丸が口を挟む。

「ただ今、近衛近右衛門からの通信が入りました。結界を侵入された件について報告を求めています」

「む…そうか、あのじじい、大事な所で…待てよ？」

そのまま暫く二人で話し合っていたが、纏まったのかこちらに向き直ると、エヴァは頷いて口を開いた。

「アーチャー、お前は現状を把握したいのだったな？」

「あ、ああ、そうだが…？」

話の突然の飛躍に付いていけず戸惑うが、エヴァたちにはお構い無しらしい。茶々丸に向かって頷くとこちらに背を向けた。

「丁度いい具合に話が出来そうだな、付いて来い」

「…どういう事だ？」

「お前についてうちのじじい…この地の責任者みたいな者が興味を示していてな、話が出来ないかと言ってきた。詳しい事が聞けるだろうし、悪い話ではないと思うが？」

エヴァの話を聞く限り、私の存在については周知と言う事だろう。あまり好ましくない状況ではあるが、対話を求めてきていると言う事は少なくともすぐに争いへと発展する事にはならないだろう。

私としても話が聞けるのはありがたい事だ。乗らない手は無いな。

「いいだろう、承知だ」

「よし。では行くぞ、付いて来い」

歩き出したエヴァの背を追うように足を踏み出す。この一歩が自分にとってどんな結果をもたらすのか、それは分からない。

しかし、新しい状況に今までとは違う自分。今だ見えぬ状況に困惑はあるものの、何かが少し違う気がする。それは何かはまだ分からないが、悪い気はしなかった――。

「あ、お待ち下さいマスター」

「何だ？」

「部屋が散らかったままですが、宜しいのですか？」

「——あ」

出会いは…（後書き）

第二話をお送りしましたが、いかがでしたでしょうか？

例によって見苦しい表現もあつて恐縮ですが、楽しんでいただけると幸いです。

今回からは視点を完全にアーチャー一人に絞りました。反応が恐ろしくも楽しみです。ストーリーもいよいよ動き出しますが、ご意見ご感想があればありがたく頂戴いたします。

なお、最後になりましたが、貴重な感想を下さった煌 焰様、アルト様、武士堂様、そして読んで下さった方に最大の感謝を。ありがとうございます。

引き続き募集はしていますので、アドバイスや武器案なども、どうぞ宜しくお願い致します。

Hard Days? (前書き)

お待たせ致しました、『Fate/Another Magister』第三話をお送りします。

11/13 後書きの誤字を修正しました。

Hard Days?

「——だから、言っているだろう？ それは私のせいではないと！」
「いいや、お前が召喚されて、この家に落ち、ここを散らかしたと言うのが事実だろうが！」

「それは召喚に不手際があつたからだ、本来ならば魔法陣の許に召喚されてしかるべき。君が召喚者と言うならば、君の描いた魔法陣の許に召喚されていただろう。誰が散らかしたと言うならば、召喚した君になるう」

「何を言うか、私が召喚主と言うならば、私の命令に従え！」

詳しい話を聞く前に、茶々丸が気付いた問題点——誰が部屋を片付けるのか——についての議論だが、一向に事態は進展せず、先程から平行線を辿っていた。

私としては喚ばれて気が付けば空にいたわけで、この場を散らかしたのは不可抗力であり、責任など無いと思っている。しかし、それはエヴァからすれば納得がいかないようで、私に片付けさせようと言っのだ。

正直、知った事ではない。

「それは違う、主従関係など無い。君の存在も、君の言葉にも強制力は感じられんし、する意味も見出せない。だいたい、主従と言うのなら、相当する態度と言うものがあるう？」

「なっ、貴様、言うに事欠いて……ふ、クク、良からう」

やっと折れたか。まったく……待て、そのかつての主をあかいあくま髣髴とさせる笑みは何だ！？

「ああ構わんとも、片付けはせずとも良い。そうか、そうだな……主

従で無いならば、お前には関係ないな」

「あ、ああ……？ 理解してくれて何よりだ。では――」

「そうだな、何処へとも行くがよい。責任者には私が話を付けておこう。無関係だしな。ああ……お前は来る必要は無いぞ？」

「――な！？」

待て、急に何を言い出すんだ！？

関係無いなどとそんな馬鹿な、無い筈がない、そもそも――いや待て、まさか！？

「召喚された責任が私にあると言うのなら、報告する義務も私の一存で構わないだろう？」

「く……」

「……マスター、それは屁理屈――」

「構わんぞ茶々丸。主従とは言わずとも手を貸す程度、親切の範疇だろうに……そんな事も理解しない者など知らんな」

「む……」

ニヤニヤとまあ何ともまた……上手い事を言う。責任の所在を全か無かで絞りつつ此方の『情報が欲しい』と言う立場を的確に突いてきている。しかも、責任を私に押し付けるとしても、主従ではないと言う事を明言している事は、作為的に選びやすいような条件として組み入れたか。

しかも、あくまで親切の範囲に押し留める事により、此方の良心に訴えかけてくるとは……！

「ぐ……」

「どうした客人？ お暇ではないのか？」

「……チツ……ええい、良かろう……！」

「ふん、何の事だ？」

「部屋の事だ、片付ければ良いのだろう!？」
「おお、片付けてくれるか。親切だな」

まったく、ニヤニヤと実に口惜しい…！ 選択肢を狭め、誘導しておいて親切も何も無かるう！

「では、頼むとしようか、アーチャー？」

「………了解した、地獄へ落ちろエヴァ」

「く…ふふ…ふははははは…！」

結局、散らかった部屋を綺麗に片付けさせられ、ついでに天井も修理させられたので余計な時間を食ってしまった。幸いにも応急処置程度でよかった上に、こういった作業には昔の経験から慣れていたので早く終わらせられて良かったが、人を待たせていたであろうに悠長としていて良かったのだろうか？

にしても、かつての主といい、エヴァといい、ついでに言えば二人の姉にも妹のような後輩にも、私の反論はまったく通じていなかった記憶がある。これは彼女達が強いのか私が弱いのか……いや止めよう、考えると無性に虚しくなってくる。

そのまま責任者とやらの元へ案内されたが、スーツ姿にひげ面の男と瓢箪のような頭の老人が居た。あの頭の形状、人としてあり得るのかと気にはなったが、問いかけようにもどうも彼らは虫の居所が悪いらしい。それはそうだろう、呼び寄せてから到着までにこれだけの時間がかかってはな。

まあ兎も角、各々の自己紹介によると、スーツ姿の男が高畑・T・タカミチ、瓢箪頭の老人がこの地、麻帆良学園の学園長で責任者で

ある近衛近右衛門らしい。正直、マキリの老体のような人物が出てくるかと危惧していたが、杞憂だったようだ。

改めて、この地の事、私の事、そして認識の違いなど、エヴァと話した内容と少し踏み込んだ話題を交わして、今に至る――。

「……成る程。俄かには信じられん事じゃが、お主を見る限り事実と言うことかの。尋常ではない量の魔力が証か。それでいて、魔法使いではないと…？」

「そうだ。同じく魔力を扱う者としても、魔法使いとは人の手に負えぬ奇蹟を体現する者であり、世界根源の渦の理に干渉する者であつて、その在り様は科学・技術で実現可能な事象を別の手法で可能にする、魔術師とは違う。分類するならば、私がいかに魔力を持っていようと、奇蹟を体現できぬ以上、魔術師に属する事となる」

「ふむ、それが“魔法使い”と“魔術師”の定義か…我々の言う魔法使いとは定義が違うのう…。そもそも、西洋でも東洋でもなく、まして“気”でもない…形式からして違うと言うのが難しい」

「“気”と言う表現は、魔術が自らの内に干渉するという点では似ているが、それでも尚、大きな語弊のある言い方だな」

「ふむ…」

多少の身の上、知識は明かしたものの、私の存在自体が異質である事――投影や、固有結界について、それ以前にどのような魔術が使えるかも話してはいない。必要性を感じず、手の内を明かすのは早計と考えたからであるが、どうやら正解だったようだ。

説明を聞けば聞くほどに、魔法について謎が深まる。そんな中で、唯一の対抗手段となり得るカードは切るべきではないからな。

「とすると、益々謎じゃのう…。やはりお主の存在は、最早この世界のものではなく、別の世界の存在とでも言わねば説明がつくまい」

「ああ…信じられんが、そのようだな」

「…待てじじい、アーチャー」

近右衛門の言葉に、私としても頷かざるを得ない。しかし、エヴァには何か引つ掛かる点があるのか、纏まりかけていた話に割って入る。

…そう言えば、先程認識の違いがあつたな。

「お前達の話を経合しては考えると、アーチャー、お前の存在がおかしい事となる」

「ふむ、どういう事だ？」

「お前の存在自身が、お前の言う魔法に他ならない気もするが…それはいい、この世界との差異と考えれば納得はいかんが理解はできる。しかし、先程も言ったと思うが…普通、英霊と言えば優れた働きをした人物が死後に高位存在へと昇華され、人々に祭られたモノの事だろう。まあ、その身が具現化するに際し魔力を帯びるのはまだ分かる。だが、たかだかその程度の者が技術に因るとはいえ、魔力を行使する能力を持つというのはどういう事だ？ お前の言う英霊とはどういった存在なんだ？」

なるほど、英霊と言う存在に対して根本的に認識が違っていたようだ。それも当然か、世界が違えば認識も違う事もあるう。

「そうだな、私の認識している英霊とは、存在を過去・現在・未来に問われず、神話・伝説・実在も問われず、ただその存在がなした功績によって生まれる信仰を基とし、その信仰をもって人間霊である者を精霊の領域にまで押し上げた存在、と言うべきだろう。輪廻や因果から逸脱し、不変であり、人々の想念に因るが為にその真偽は関係なく、ただ信仰心とその知名度をもって存在を為す者だ。多少の差異はあれ、その認識で良いだろう。当然能力も問われない。

私の場合、元々魔力を持ち、それを行使する術を持っていただけに過ぎん。この世界でもその在り様となっているかは不明だが」

「何だと…？ では、ただの人間だろうが何だろうが、功績によっては英霊たり得るとも言うのか！？」

「違う。功績だけでなく、それに対する認識と信仰心が必要だ」

「それでも…馬鹿な、初耳だぞそんな事…」

これ程までに驚かれるとは、正直予想外の反応だ。真祖である存在がほぼ真逆に位置する英霊の存在・役割について知らないなどという事があり得るのか？

英霊の担う人類の守護者としての役割は、この世界ではその任を別の存在が担っているとも言える事であろうか？

ここまで認識が違うとなると、真祖という存在についてもはっきりと明らかにする必要があるな。

「エヴァ、逆に私も聞きたいのだが…」

「な、何だ？」

「君の言う“真祖”とはどういう存在なのだ？」

「はあ？ …真祖とは今は失われた秘伝により“自ら”吸血鬼になったものの事だ。本来は不老不死であり、同時に強大な魔力を得る存在となる。それは年を経ることに強力になり…って、それぐらい常識だろう？」

「……それだけか？」

「む？」

「いや……星の守護者としての役割や、平静ではいられない程の吸血衝動は無いのか？」

「星の守護？ 平静でいられない程？ ……何の話か知らんが、真祖だからと言って課せられる役割など無いし、吸血衝動も無くはないが、無視できるレベルではないか？」

「……」

「何だ、お前の世界の真祖は違うのか？」

ここは素直に答えてよいのだろうか。仮にも真祖本人に話してしまつて、この世界や人類に何かしらの影響が出ないとも限らないのではないか？

しかし、英霊の存在について説明した時にそんな様子は見られなかった事を考えると、純粹に知らず、存在としても別の者、と言う事なのだろう。まさか、真祖の知識があつて英霊の知識がないと言うこともあるまい。

ならば、話しておくべきか。

「そうだな…先程話した英霊とは対となる存在、人に頼るではなく地球そのものが生み出した強大な存在、人霊ではなく自然霊に分類される者だと答えておこう」

「何？…それが、抑えられない吸血衝動を元に行動するなど、絶対の脅威ではないか！？」

「人類の守護者に対する、星の守護者なのだ、当然だろう」

「…それはもう、真祖であつて真祖ではないな。少なくとも、私とは別の存在だ」

「そうだろうとも。エヴァ、君が私の知る真祖であれば、今頃この場には誰も居なくなっているだろう」

そうなっていない事実に感謝するべきだろうか。それにしてもなんという事か…根本的に私の知る“真祖”とまったく存在が違っている。

事実かどうか確かめる術はないが、ここで偽つても仕方の無い事。ましてや、先程から眉を顰める近右衛門、高畑、そしてエヴァの表情には驚きこそあれど偽りは見られない事を考えるに、やはり信じられない話だが事実らしい。となると、存在からして違つものがある以上、少なくともここは私の知る世界ではないと考えるべきだと

はつきり結論づけられるが…。

「ふむ…話は分かった。しかし謎だな、だとすると何故アーチャーは私に喚び出されたのだ？ お前やじじいの話では、簡単に召喚できる存在ではないのだろうか？」

「…それは私にも分からん。本来ならば眠るはずの所を喚ばれて今に至るのだ、何故召喚されたのか、それを知る前にここにこうして居るのだからな」

「わしにも見当がつかんのう。何かを為す意義があるのか、それとも案外、単なる事故であつたりするのか…」

何かを為す意義…か。また、世界を救うために“体のいい掃除屋守護者”とならなければいけないのか？ しかし、守護者としての意義があやふやなこの世界で、ましてや人類を脅かすモノの存在も感じられない中で、それが必要とは思えない。

それに、今までと違い私には『答え』がある。そう思うと、本来ならば暗闇しか待たないその先に、光が一筋差しているかのようだ。どうせ何も分からないならば、別れ際の主の期待に答えてみようか。得られた『答え』、間違っていないかった願い、それをもう一度、貫ける機会があるというのなら、試してみたい。衛宮士郎ではなく、エミヤシロウアーチャーとして。

「…学園長、彼が召喚された際に使用された道具は、どこから手に入れたもののですか？」

人知れず決意を固めていると、それまで口を閉ざしていた高畑が口を開く。

確かに、それも少し気になっていた。どうしてこんな物がこの世界にあったのか。召喚された目的が分からずとも、その理由を知ればヒントくらいにはなる可能性は無きにしもあらずだからだ。

「うむ、図書館島の地下で見つかった物らしいが、価値も用途も不明での。それならばと詳しそうなエヴァに渡したのじゃ。発掘するでもなくあったという事じゃったから、詳しくは分からの…」

「なるほど…そうでしたか」

「ふむ…君達でもお手上げか、仕方あるまい…」

そう簡単に理由が明らかになるとも思えなかったが、これで私がここに居る目的や理由を探るのは振り出しに戻ってしまった。意図した訳ではないのに出てしまった言葉は、この場の雰囲気若干暗くしてしまった。すまない、近右衛門、高畑。

「ふむ…それにしても、よくもエヴァはそれを召喚する気になったのう」

「ん…？」

「調査をして欲しかったのじゃが…まさか、不明の物を使用するとは思わなかったぞい」

「エヴァ…君ってヤツは…」

「ほう…？」

「う…」

学園長の言葉に、顔に少なくない苦味を混じらせつつ、高畑は目を横へと移す。私としても聞き捨てならない言葉であったため、高畑の目を追うように視線を移した。正体不明の魔道具のような物をよく自分で使う気になったものだ。知らず白々しい眼差しになるのも仕方ない事だよ、エヴァ。

案の上、微かに顔を引きつらせ、薄らと汗をかいているエヴァンジェリンと目が合う。

「な、何だお前らその目は！？」 せ、精査しようによく分からず、

手が付けられなかったんだ、実際に魔方陣を起動してみるしかあるまい!？」

「…マスター、実際は気まぐ」

「待て待て待て茶々丸! そ、それは…: そう! あくまで理由の一つに過ぎん、事実だが言い訳には——はっ!？」

自分で墓穴を掘ったことに気が付いたのか、エヴァが固まる。まあ、私としては既に理由を聞いていたので特筆する程何か、と言うことは無かったが、高畑と学園長は違ったらしい。

半ば諦めたように揃ってため息をつく、身も蓋も無い行動だが、当たり前なのだろうか?

にしても…分かった事は図書館島にあったという事だけか…。大したヒントにもならず、前途は多難だ。

「まあ、召喚してしまったものは仕方が無いじゃろ。エミヤ君…いや、アーチャー君だったかな、君はこれからどうするのじゃ?」

クラス名に敬称付けにはどうにも慣れそうに無いが、“衛宮士郎”ではなくエミヤシロウとして認識されていると思えば悪くない。
それはそれとして、問題はこれからどうするか、か。驚きの連続で今まで考えていなかったが、どうすればよいのだろうか。肉体として現界して居る以上生活空間が必要になるし、現時点では平気だが、感覚的には人間に近いようで、睡眠も食事也不可欠となる可能性がある。最悪の場合、かの騎士王ではないが食事で魔力回復なんて事もあり得る。

「そうだな…取りあえずは衣食住の確保、そして足りない情報の把握に努めようと思う。私が喚ばれた理由など、不明な点は沢山だ」

「成る程のう…当てはあるのかの?」

「む…」

痛いところを突くものだ。身一つでこの世界に来たというのに、
当てなどあるう筈もない。

あれば今頃こんな所に居ない。見ず知らずの者より先に頼っている
だろう。

「…残念ながら、無いな」

苦し紛れの答えに、近右衛門の眉の奥が光った気がした。何が言
いたい？

「ふおつふおつふおつ、そうじゃろつ。そこで提案なのじゃが…
アーチャー君さえよければ、ここで過ごしてみんかの？」

「何？」

「ここで…麻帆良学園で、働いてみんか？ もちろん、衣食住は提
供するし、給料も出そう。悪くないと思うのじゃが？」

「……」

いきなりの申し出に言葉に詰まる。

悪くない話どころか、破格の条件ではないか？ 衣食住だけでな
く給料も出すなど、何か狙いでもあると思えない。

「…何を企んでいる？」

「ふおふお、人聞きの悪い。お主を守ろうと言っただけじゃよ」

「信じられんな」

「何、比喩表現じゃ。お主の世界と同じで、此方でも魔法は一般人
に対して秘匿されるべき物での、お主を放っておくのはあまり好ま
しくないのじゃ。まして未知の世界らしき所から来て、魔力能力共
に未知数ときておる…言い方は悪いが、問題は目の届く範囲にある
方が良からう？」

そう言つと近右衛門は立ち上がり、此方へと歩み寄ると手を差し出す。言葉とは裏腹の行為だが、どういう意味だ？

「物騒な言い方をしたのが、本音はそんな事構わんのじゃ。お主は悪い人物では無さそうじゃし、危険な事はせんじやろう。ならば、困っている者は助けてやると言つのが普通じやろ？」

益々意味が分からない。そんな甘い言葉、信じろとも言つのだろうか？

知らずに鋭くなっているであろう眼差しを向けるも、しかし、近右衛門の目は透き通っていて、私に読み取れたのは親切と好奇心だけだった。

「…僕も学園長に同意かな。悪い人じゃなければ、協力し合えるといいね」

「フン、気にするなアーチャー。じじいもタカミチも、ここに居る者は皆お人よしなんだ」

見れば、高畑もエヴァも笑っていて、多少の悪戯じみた様子は感じられど、含みは一切感じさせない。逆にそういう見方をしている私が恥ずかしく思う程であった。

思えば今まで戦つてばかりの日々であり、このような表情をされる事はあれど、記憶に埋もれる程極端に少なく、また偽り混じりの事も多かった故に縁遠い存在だと思っていた。かつての主や愚直なお人よし宮士郎に思考を改めさせられたものだが、まさか再び直面する事が出来るとは。これは、ありがたい誤算だろうか。

「…ククツ、その理論で言えばエヴァ、君もお人よしと言う事かな？」

「なっ——」

「一本取られましたね、マスター」

「う、うるさいっ！ お前ら笑うなっ！ っ…ええい、もう良いだろっ、帰るぞ！」

茶々丸の言葉とエヴァの反応に近右衛門、高畑から笑いがこぼれる。私も皮肉ではなく、心から頬が緩むのを感じる。

しかし、それに居た堪れなくなったのか、エヴァは茶々丸を連れて部屋を出てしまった。

そういう所がからかわれる元になるのだろうに…。

「ふおっふおっ、早くも打ち解けておるようで何よりじゃ。それで…最早分かりきっておるが、一応答えを聞こうかの？」

「…ああ、世話になるとしよう。ありがとう」

こんなに素直に礼が言えるとはな。意外ではあるが…ふむ、これも悪くない。

しっかりと近右衛門の手を握ると、私は力強く頷いた——。

「…で？ 具体的な話を聞きたいのだが、働くとは何をすればいい？」

握手したのはいいが、具体的な話は何も聞いていない。思えばそれにも関わらず返事をしてしまったのは、今思えば早計だったか。

以後気をつけねばならないな。

「おお、そうじゃそうじゃ、お主にはこの学園で教師になってもらいたいのじゃよ」

「……………何だと？」

何か今、信じられない言葉が聞こえたのだが？

「じゃから、教師じゃよ。お主にはこの学園に住み込みの教師として働いてもらおうかと思っておる」

「な…何を言っているのかね近右衛門！？ 教師だと？ いくらなんでもそんな事出来るはずが無いだろう！？」

聞き間違いではなかったか…。

才能には恵まれず、多くにおいて一流に届かなかった身なのに、人に物を教えるなど出来る筈がない。そもそも、教員免許など取ろうと思つた事も無いのだ。

様々な世界・時代を渡り歩いたので知識はあるが、それでも人に教えるとなると話は別だ。

「何、大した問題では無かろう。子供ながらに先生をしている者もある事だしな」

「子供ながらに教師だと？ 何を馬鹿な事を…」

「ふおお、百聞は一見に如かずじゃ。呼んであるからもうすぐ来るじやろう」

子供…つまり未成年か。本来ならば教育機関で学ぶ立場の者が教える立場に立つなどと、聞いた事も無い。そもそも、体裁など色々気にする事があるのではないか？

そう思つて学園長を問い詰めようとした所、部屋にノックの音が

響いた。

「ほれ、来たようじゃの。高畑先生、開けてやってくれんか？」

「はい」

最も扉に近かった茶々丸が、ゆつくりとドアを開ける。

そこに居たのは、まだ十歳程の小さな男の子だった。——なんだと？ 本当に男の“子”だと！？

「失礼します、学園長が呼びだと——あれ、タカミチ？ それに、そちらの方は？」

「よく来たのネギ君。紹介するよ、こちらはネギ君のクラスの副担任になる、アーチャー君じゃ。授業をサポートをしてくれるじやろう」

「な…ま、待て！ 私はまだ…やる…とは……」

そこで私に振るのか！？ しかも既に教師をやる事になっているだと！？

信じられん…急な展開に先程から驚いてばかりいる。しかも、子供の教師は実在するときたものだ。これはもしかして、私に選択権は無いのではなからうか…？

否定しようにも、当の子供先生はキラキラした目でこちらを見ている。

くっ…そんな純粋な目を向けないで欲しいものだ。

「……アーチャーだ。名はエミヤシロウと言うが、アーチャーと呼んでくれ」

せめて長い沈黙によって意思表示させてもらおう。効果の程は疑わしいが。

「わあ…あ、す、すみません。僕はネギ・スプリングフィールドです。2-Aの担任で、教科は英語です。宜しくお願いします！…日本語、お上手なんですね」

「む…」

子供とは思えない礼儀正しき、しかも口調は流暢だ。

いや待て、俺は外国人に見られているのか？ それは…日本人らしからぬ体躯である事は自覚があるし、髪は白髪で肌は浅黒いし、仕方が無いが…どうも気に入らん。

「アーチャー君には教師として以外にも、寮の副管理人をしてもらう予定じゃ。ほら、ネギ君の所の階に空き部屋があつたじゃろ？あそこへ案内してやってくれんか？」

「あ、はい、分かりました」

「むっ？ い、いやちよつと待ってくれ！？」

知らぬ間に話が進んでいる。教師役に寮の管理だと？ 冗談ではない！

そもそも、一人ひっそりと暮らせるかと思えば、寮に入れられるだけでなく、その仕事までとは…流石に手が回るとは思えんし、教師役で精一杯だ。

「むう…仕方ないのう。では寮の仕事は手空きの時で構わんぞい」

「そういう問題ではないのだが…」

「まあまあ、ネギ君は悪い子ではないですよ。それに、お互いに魔法先生なんですし」

「そういう問題でも…そもそも論点が違——何だと？」

高畑の言葉に、はっとして子供先生を見る。するとネギ君も気に

なったのか、こちらを見ていて、驚きに目を見開いていた。

今までの遣り取りのせいですっかり失念していたが、確かに、見れば魔力を持っているようだ。しかも、弱っているというエヴァとは比べ物にならない魔力量を誇っている。

その貯蔵量はともすれば、かつての主を超えているように思う。

「な、何と…」

「ふおっふおっふおっ、分かったかのアーチャー先生？　そういう訳で、キミがネギ先生の近くに居るのは都合の良い事なのじゃよ。

エヴァの元でも良かったのじゃが、彼女は嫌がるだろうしの」

「…むむ、確かにそうか。不本意も甚だしいのだが、仕方ない」

「ネギ君も、色々と言アリじゃが、頼めるかのう？」

「あ、はい。分かりました」

随分と物分りのいい子供だな。普通これぐらいの年の子供ならば、詳細が話されず、見た目も普通ではない私に対し、何かしら興味や疑問が沸くだろうに…。

しかも、それでいて先生などとは、冗談にしか聞こえない。近右衛門——いや、学長と呼ぶべきか？——の簡単な説明にふんふん頷く姿など、むしろ見た目より幼い印象さえ受ける。

「…と言う訳で話は以上じゃ。ネギ君、アーチャー先生を案内してやってくれるかの？」

「分かりました。アーチャーさん、行きましょう」

「む、ああ…」

結局、否定できぬままに進んだ話も纏まってしまい、怒涛の展開に飲まれるようにして私は部屋を後にした——。

「――着きました、ここがアーチャーさんの部屋です」

学長室を後にしてから暫し。ネギ君と簡単な自己紹介や他愛ないやり取りをしつつも部屋へと着く。途中、少しだが学園内の様子を見る事ができ、文明や生活様式は現代だと確信できたのは行幸だった。

そうしていよいよ寮内へと入ったのだが、やはりと言うべきか、見かけた人物は女性ばかりであった。すれ違う者皆が振り返るのは必然だろう。女性ばかりの中に男、しかも子供先生ではない者が来れば、注目も集まる。事実、ずっと視線を感じているぐらいだ。色々。

これからここで生活する事になるのかと思うと、辟易するな。

「ふむ、ここか」

「何かあれば僕に尋ねてください。向こうの、643号室に居候していますから」

「居候？ 君の部屋ではないのかね？」

「あ、はい。あの部屋はアスナさんとこのかさん…クラスの生徒の部屋なんです」

「そつか、なるほど」

風紀：は大した問題ではないか。ネギ君ではな。いままで平気だったのだろうし、これからも平気…と断言は出来ないが、それでも心配する程の事でもなからう。

寧ろ、それを考えれば私のほうがまだ問題だ。私はどうにかする

気などさらさら無いが。

「それでは、また明日」

「ああ、ありがとう」

去っていくネギ君を見送り、その背が見えなくなつて一つ息をつく。

さつきから向けられていたうちの一つで、最後まで離れなかったものだが、周りに人はいない、もういいだろう。

「……いい加減、出てきてはどうか？」

「……気付いていたか」

ネギ君の行き先とは反対、私から見て右手廊下の曲がり角から、応える声上がる。女性の声だが、エヴァではなく聞いた事の無い声だ。

「興味本位であろう無遠慮な視線ならば無視するがね。此方を探ろうとする、静かな気配は無視できんよ。まして……巧妙なまでに隠されていてはね」

「フ……違いない。なるほど、只者ではないという直感は当りか」

姿を現したのは、男性でも珍しいほどの長身の女性だった。褐色の肌に長い黒髪が印象的ではあるが……ふむ、身のこなしや気配の殺し方を見るに彼女こそ只者ではないな。

楽器を入れるケースを持っているが、微かに火薬の臭いがする。見た目通りのケースではなさそうだ。

「……明日からここで教師をする事になってね。住まいとして宛がわれただけに過ぎないさ」

「胡散臭いものだ、信じられないな」

「では学長なりネギ君なりに確認でも取るといい。初めから見ているのに信じられないのなら、信じるに足る要素を集めたまえ」

不穏な空気が満ちる。しかし、それは長くは続かなかった。女性が厳しい表情を一転して崩したからだ。

これは…私とした事が、試されたか。いよいよ只者ではないな。

「フフ…そこまでお見通しか、済まない。興味深かったのね」
「何、構わんさ。心情は理解できなくもない」

女性は此方へと歩み寄ると、隣の部屋の前にケースを立てかける。
ふむ、どうやら隣人と言うことか？

…と言う事は、まさか？ 中学生だと？ その姿で！？

「……何か失礼な事を考えていないか？」

「むー？ ……い、いや…」

読まれたか。昔から勘の鋭い女性とは縁が多かったが…これはむしろ、私が読まれやすい、心中が顔に出やすいと言う事のような気がするきたな。

しかし…

「…察するに君は、その部屋の住人であり、つまりは学生……中学生と言うことかね？」

「……そうだが、何か問題でも？」

目つきが険しいぞ、君。

驚くべき事に本当に中学生だとは。かつての主より大人びているだろう、性格的にも身体的にも。最近の中学生とはこうも大人びて

いるのだろうか？

決して口には出さないが。これで中身もあかいあくま以上だった
りしては目も当てられない。

「いや済まない、何でもないんだ」

「……まあいい。それで、貴方は誰なんだ？ 男の身でこんな場所に
居るんだ、身元ぐらい伺っても良からう？」

「そうだな…すまない。私はアーチャー、明日からこの学園で教師
をする事になった者だ」

「そうか、だからネギ先生と。私は龍宮、龍宮真名だ。その、アー
チャーと言つのは本名か？」

「…いや、通り名のようなものだ。名はエミヤシロウと言うが、あ
まり呼ばれなくなてね」

「ふむ…アーチャーか…」
「射る者」

私の言葉に何かしら感じるものがあつたのか、考え込むようにに
黙る龍宮。普通に聞いていれば不思議に思うことだが、名を名乗っ
たのは失敗だつただろうか。

まさか、この世界でも名前から束縛出来るのだろうか。だとすれ
ば迂闊だつたか…。

「…まあ、深くは聞かないよ。では、そろそろ失礼するよ、アーチ
ャー先生」

「む？ そ、そうか…」

何かしらあるかと思っただけに、思わず拍子抜けしてしまうな。
まったく、この世界に降り立って、それはそう簡単に物事が進む
とは思っていなかったが、まさかここまで予想外の事態に陥るとは
思ってもみなかった。

仮にも英霊として、サーヴァントとして、戦いに身を置いていた

私が学校の教師とは…記憶の中にいる同じ職だった姉に笑われそう
だ。

「はあ…」

その様を省みてため息を一つつくと、自室となった部屋の扉を開
けた――。

Hard Days? (後書き)

第三話、如何でしたか？

今回は説明が多くなってしまいましたが、果たして上手く説明できているか、不安です。

私なりの解釈と思考を元に少しずつオリジナル性を出そうと思った結果ですが、上手く表現できているかも怪しい具合ですね。ご意見ご感想、アドバイスが是非とも頂きたいところです。

最後に謝辞を。感想を下さった煌 焰様、果てなき理想様、東方の使者様、そして読んで下さっている皆様に最大限の感謝を。ありがとうございます。

まだまだ始まったばかりですが、どうかお付き合い下さい。

初授業？（前書き）

大変お待たせ致しました、、『Fate/Another Mag
i s t e r』 第四話をお送りします。

初授業？

宛がわれた自室へと入った所で、漸くある程度気を休める事が出来た。初めは盗撮盗聴の警戒を試みたものの、そのような気配はまったくなく、また束縛や阻害をするような仕組みも感じられなかった。どうやら、この住人達は学長を筆頭にいい意味で変な人物ばかりらしい。先程あった龍宮といい、腕利きと呼べるものは沢山いるだろうに、余裕の表れとも言うのだろうか。此方としては気楽で良いが、安全面からして大丈夫なのかと心配になる。

まあ、それは私には直接関係の無い事…と言える程無関心ではない。られないが、上の者が意向なのだから問題は無いのだろう。いざとなれば自分の身はどうとでもなるし、腕利き達が黙ってもいい。学園は結界が覆っているようだし、この世界でも平和ボケしている日本のようで、十分と言うことが。

外の問題が片付いた所で、重要な私自身の事だ。あれから、時間の経過と共に調べてみたが、結論から言うところの体には睡眠も食事も絶対に必要という事は無いようだ。試しにしばし眠らずに夜をすごしてみたが、眠気を感じる事もなく、そして空腹を感じる事もなかった。しかし、ではそういった行動が取れないかと言うとそうでもなく、眠ろうとすれば眠れたし、食事を取れば味や満腹感を感じる事ができた。不思議な話だが、肉体としてある以上は納得だ。

しかし、だからといって不要だとは言いがたい。なぜなら、睡眠や食事によって魔力が回復する事が確認されたからだ。なんとも中途半端なものだと思わなくも無いが、魔力の回復手段が判明したのは僥倖と言えるだろう。昨日の消費分は、実験に寝て起きたときには回復していた。

ふむ…受肉した影響による自然回復か、はてまた大気中のマナを吸収でもしたのだろうか？ マナ濃度は濃く、あり得ない話ではない。すると…私の使う魔術も恩恵が受けられるか？ 一度、試して

みる必要がありそうだな。

まあそれはそれとして、基本的な事は把握できた。具体的に地理環境を調べるとしよう。今は――午前5時少し前、早朝か。朝の散歩がてら見て回るのに丁度良い。ついでに体の調子を確かめつつ鍛錬もこなしておこう。

「――おや。おはようございます、アーチャー先生」
「む？」

部屋の扉を開けた所で、隣の部屋の住人と丁度鉢合わせた。昨日会ったばかりの楽器ケースを持った少女、確か……龍宮真名、だったか？

と、呼び捨てはいかな。教え子にならないとも限らないし、教師となる立場ならば君付けが妥当か。

「……ああ、おはよう。龍宮君」

「こんな時間からお出かけですか？」

「ああ、運動がてらに外を見て回ろうかと思ってね」

「そうですか……ふむ……」

何気ない挨拶だ、どうと言うことはない。なのに何故そんな訝しげな目をするのだろうか？

もしや、この私の正体に何か感づいたのか？ いや、落ち着け。

この世界での英霊の存在は私の知る世界とは違う認識であった、それは無いだろう。まさか……女ばかりの世界に紛れ込んだ哀れな変質者とも言い出すのか！？

……有り得ん。昨日会ったし今挨拶したばかりだ。

しかし……目の前の女性――いや、信じられんが中学生だったか。その眼差しはともすれば“若さ”ではなく“老獪さ”を感じさせる気がするが――

「……今、また何か失礼な事を考えませんでしたか？」

「む！？ いや、そんな事は…無いが？ そ、それより、何かあるのではないか？」

「…ああ、そうでした」

兎も角、昨日に引き続き少女からは只者ではない気配を感じられ
たし、よくよく視れば微細ながら魔力も感じられる。英霊とは言え、
生前と大して変わらぬ私のセンスではつきりと感じ取る事は難し
いが、それでも理解は出来るというものだ。

魔法関係者

“裏に通じる者”と言う可能性もある、少なくとも私が只者では
ない事は気付いているようだしな。

そういえば…どうでもいい事だが、口調が違わないか？

「それは貴方が先生ですから…と、そうでした、その…昨日も気に
なっていたのですが、その格好で出かけるのですか？」

「うん？ …む！？」

予想外の切り込みに一瞬理解が及ばないがしかし、すぐに気付く。
そう言えば私の格好は召喚されてから変えておらず、聖骸衣のまま
だ。これでは甘めに見てもコスプレ以外の何物にも見えないだろう。
私とした事が…失念していた。

昨日学長は衣食住を用意してくれると言っていたし、確かに“住
”この部屋と“食”部屋の中に備え付けらしきインスタントの食料
があった。しかし“衣”つまり被服だが、流石にそれは見当たらな
かったな。

来て早々に用意するのは難しいだろう。予め用意しておくには私
の服のサイズを知っておかねばならない筈だ。この世界は魔法があ
るとは言え、さすがにそんな事ができるとはとても思えない。

「騎士、とても言うべきですかね… いったい、何ですかその格好は？」

「む… あ、いや、これは…」

「？ 何ですか？」

拙い、上手い言い訳が思いつかない。

「その…」

「？」

「…これは… まあ… そうだ、実は昨日パーティに出ていてな！」

「…は？」

「昨日麻帆良へは来たばかりでな、歓迎会を受けて、そのときの仮装のまま来てしまったのだよ！」

チツ… 我ながら無理がある！

この勘の良さそうなじよせ、いや少女に対して何処まで貫けるかわからないが、他に何も思いつかないし、第一言ってしまった以上これで押し通さねばならんか…！

「はあ… しかし、昨日は」

「いや昨日は慌しくてな！ そうだな、この格好では拙い、着替えてから出るとしよう！」

「あ、先せ——」

まだ何か龍宮は言いかけていたが、これ以上の追求を避けるためにも一旦室内へと戻る。ノックが来ない所を見ると、これ以上追求する気はないということだろうか、危ない所だった。

しかしどうする？ 衣類は今だ手元には無い、購入しようにもこんな時間から空いている服飾店はないだろうし、よしんばあったとしても、何処にあるかわからない。学長を尋ねようにもこんな時間

では気が引ける。

大体、学長の元へ行くまでこの格好と言う事だろう。あの注目のされ方は、少しは衣装のせいもあったかもしれない…この格好で歩き回っていたのでは無理も無い。

ネギ君…指摘してくれても良かったろうに。いや、案外気づいて無かったりするのか…？

「いや待て、今は格好をどうするかだ…」

敢えて言葉に出し、気持ちを落ち着かせる。とは言え、今すぐ衣服を用意する手段など普通は思いつかない、万事休すか…いや待て、無い事は無い。

“普通には”無いだけだ、ならば“普通ならざる”事象を起こせばいい。そうだ、ついでに負荷を試すいい機会でもある。

何故今まで思い至らなかったのだろうか、元よりこの身は作り出すモノ…剣に特化した存在とはいえ、他の物でも出来なくは無い筈

――！

「――トレース オン
投影、開始」

目を閉じ、只管に思い描く。複雑な工程は必要ない、何か宝具を投影するならば兎も角、ただの衣服、しかも既存のイメージあるものなど、魔力消費も高が知れているだろう。

だがまさか、新たな世界に降り立って、未だに投影するのが武器ではないとは、何とも不思議な気分ではある。初めは咄嗟に出したクッションであって、今度は衣服だ。

編み上がるイメージはシャツやズボンなど、後は仕事用にスーツを用意しておく位か。

「ふむ…」

一通り出来上がった物を眺める。思っていた以上にかかる負荷が軽かったのはどういう事だ？ てつきり軽い倦怠感の一つや二つは覚悟していたが、どうもそれが無い。宝具を投影した訳ではないからだろうか。

衣服も欠損や不備は無いどころか、オリジナルと何ら遜色なく、出来は想像以上に良い。マイナス補正も覚悟していたが、ここまでの出来となると、宝具を投影しても恩恵が受けられそうだ。

と、ノックの音が響く。扉に阻まれてやや聞き取りづらいが、声の主は先程分かれたはずの龍宮真名君のようだ。

出来れば避けたいところだが、出ないわけにはいくまい。急いで着替えて扉を開く。少し待たせてしまったが、去らずに待っていたようだ。

「…アーチャー先生？」

「何かね？」

やはり、訝しげな様子で龍宮真名君が立ち尽くしている。しかし、その眼差しは細く鋭く、強い魔力を感じさせて…成る程、どうやらあれは魔眼の一種らしいな。此方に何か負荷がかかっている

訳ではない以上、他者ではなく自分に効果のある物の様だ。解析や遠視の類か？ あるいは…探知系か。

何にせよ、これでいよいよ只者どころか魔法に携わる者、少なくとも何かしら関わりのある身であるという確信に繋がった訳だが…これは、私の魔力行使を感じられたかな？

「……いえ…ああ、散歩に出るのでしたら、ご一緒しても宜しいですか？ 何でしたら、案内しますよ」

「む……？」

問い詰めるでもなく見逃すでもないとなると、勘付きながらも確信は持てないといった所か。直接見られた訳ではないし、問い詰めるには証拠不十分だったといった線もあるな。

いずれにせよ、我ながら失態を犯したと思わなくも無いが、ここは敢えて同行させ、その上で魔力行使を行わなければ良いか。魔力を扱える事が知られたとは言え、手の内を今明らかにするのは得策ではないしな。

それならば、ただ案内してくれるだけと言う事になる。悪くない。

「…ありがとう。では頼めるかな？」

「ええ。準備がお済みでしたら、行きましようか」

結論から言うと、彼女の案内は簡潔で分かりやすく、おかげで近辺の生活必需品をそろえられる店は押さえる事ができた。学園都市全体から見ればまだまだそのような店舗はあるらしいが、一先ず寮の周辺でとなると、これで以上らしい。

予想以上にスムーズな案内のおかげで時間が余り、今はこうして本来の散歩が出来ている程だ。途中、雑談を挟む暇さえある。

何も仕掛けてこない事から考えると、まだ疑惑の範疇で済んでいくという所かな。まあ、此方も仕掛けていないのだし、手が出せないだけかもしれないが。面倒にならなくて大助かりだ。

「――成る程、あの階に住んでいる者は皆同じクラスであり、ネギ君の教え子という訳か」

「そうです。ですから、同時にアーチャー先生の教え子にもなるという訳です。ああ、あちらが森林浴が出来るコースですよ」

「ふむ、実に広いな」

こうして実際に歩き、目で見る事で一つ気付いた事がある。学長との話し合いの際、小耳に挟んだ“結界”なるものだが、どうやらこの辺りが縁になるらしい。

はつきりと分かるわけではないが、侵入者を防ぐというよりは、内側に何かを閉じ込めているような、そんな印象を受ける。規模が大きい事から、どちらも兼ねている様だが。これについて、龍宮は気付いているのだろうか、或いは事情を知っている側なのか…尋ねてみようか？

「…時に龍宮君、君は……む？」

あらぬ方に向けていた視線を戻すと、視界の端に何かの影が映る。遠目だが人型をしているな。

だが…距離があるにも拘らず気付けたのは、視力のおかげではなく対処の大きさ故だ。何ともまた、あんな大きさの人間がこの世界にはいるのか。

「先生？　どうかしましたか？」

「……ああ、いや…」

龍宮の問いに曖昧な相槌で答えて聞き流し、代わりに目を細める。距離は1kmあるかないかと言った所か、木々に紛れて見づらいが、身長は優に2mを越しているようだ。何人かいる…20人程か？

詳細は…と確認する前に、小さな電子音が龍宮から鳴り響く。
見れば、取り出した携帯電話が発信源らしい。

「私だ。…ああ、学園長。ふむ、ふむ…何、結界が？」
「……」

結界について話している所を見るに、どうやら、龍宮は事情を知っている側で間違いないようだ。

「近いのか？ ふむ、ああ、数は？ なるほど…」
「……」

電話相手の学園長と遣り取りしている龍宮を背に、影達へと再び視線を移す。いつの間にかやや近づいていたようで、目を細める事も無く判明するのは人外であるという事だ。

数は20人、いや20体か。巨体は率直に言い表すなら“鬼”に近いイメージだな。他にも鳥人間のような者やら狐の面をつけた人間のような者やら…ふむ、かのキヤスターの使い魔のようなものか？ いやしかし、骨ではない上に、媒体が良く分かんが…特殊な召喚なのだろうか？

にしても…よくまあここまで魑魅魍魎を集めたものだ。もうすぐ朝だと言うのに、魔法とは秘匿されるべきものではないのか？ と、ふむ。目が合ったか。どうやら驚いているようだが、この程度の距離で驚かれてはな。

「分かった。報酬は？ いや、それは少ないだろう！ もっと…」
「——来るぞ」
「何？ ——チツ、詳細は後でな、切るぞ」

未だに電話を続ける龍宮に一声掛けると、それで漸く龍宮も気付

いたのか此方へと向き直る。

まったく、熱くなるのは構わないが、もう少し周りを見るべきだろうな。

「逃げて下さいアーチャー先生。貴方が何者かは知りませんが、無関係な者を巻き込むのは気が引けます」

持っていた楽器ケースを下ろし、中から何かを取り出しつつ言う龍宮。ふむ、銃か。見た目は普通だが魔力を帯びているとは、君も魔法使いの類なのかね？

普通に考えればその言動にも頷けるだろうが…しかし、この場合には当てはまるのかどうか。面倒な予感がするし引いても良いが…さて。

見た所銃は使い込まれているようだし、構えにも隙は無い。実力としては十分な物を持っているのだろう。しかし…戦わせるのか、彼女を？

「その志は立派だがね、無関係と言っただけじゃないな」

「何を…」

「私が君とご同業という事は君も気が付いているのだろうか？ まあ

厳密に言うと同業とは少し違うが…そんな事は些細だよ」

「……。しかし、私は仕事ですが、貴方は違うのでは？」

「いやそれがね、少々極論になるが、大きく分類すると私も仕事と言えてしまうのだよ」

「は？」

ククッ、冷静さが目立つ子だと思っただけだが、なるほど、呆けた顔は年相応に愛らしさがあるようだ。

まあ、君が教えてくれた事なのだがね…私と君がどういう関係かな。

「……分かりません、一体……」

「何、簡単な事だ。君は教え子であり、私は教師と言う事だよ。これでも無関係と言うかね？」

「それは……しかし」

「問答無用だ。そもそも目が合ったのは私だ、追いかけては面倒なんでな。ここで片付ける」

「……」

「君こそ、学長と何を話したのかは知らんし、腕には多少の覚えがあるのだろ。しかし、それ以前に私の生徒であるならば下がってたまえ」

常の私からすればらしくない台詞ではあるが、この世界に来て最早今更と思わなくも無い、

しかし、それでも、答えを得た私らしい台詞でもあると思うのは自惚れだろうか。とはいえもう一度、今度は得られた“答え”を試せるのだ、らしくない事を繰り返して変化を望むのも悪くない。

であれば、まずは先の障害になりそうなものを排除するしかないな。

「――トレース
投影、開始」

三度目の正直。衣類ではなく、両手に慣れ親しんだ柄の感触を投影する。

幾度の戦場を共に越えた、クラス名と反して私が最も愛用したと言える武器、干将・莫耶。白黒と、対照的に分かれたそれは、漸く昇り始めた日差しを受けて、鈍く光って見えた。

やはり、世界の修正が働いていないのか、ランクが落ちているとは思えない程の魔力が感じられる。そもそも投影に際し、過去二度と同じように魔力の消費が少なくて済んだ。

大気中のマナを利用してこそだが、別世界とはよく言ったものだ。霊的に優れた地である冬木でさえ、ここまで魔力があっただろうか。

「…な…アーチャー先生…それは!？」

驚くのも無理はない。龍宮からすれば此方の世界とは違う魔法にしか見えないのだろう。

が、説明している暇は無い。下がっていて欲しいのだがそれも叶わないとなると、彼女を守りつつ戦う事になるのか？

彼女の力量がはつきりとは把握出来ていない上に、大人しくしているか戦い出すのか分からないのが辛い、やるしかない。幸い、守りの戦い方には心得もある事だ。

「呆然としている暇はあるまいに…良からう、ならば特別に最初の授業だ」

何だかんだと話したせいで結局時間を消費した、足の速い者ならそろそろ此方に到達できる頃だろう。現に、先行してきたのか鳥人間らしき者が翼を羽ばたかせて殺到してくる。

私が手にしている得物をただの剣だからと甘く見ているのだろうか、愚直に接近してくるだけとは。油断しているのかとも思ったが、どうやらそうではないらしいな。彼らからは強い殺気を感じる。

まあ、数は数体ながら交互に入り混じりながら飛ぶ上に、その体躯の黒と相まって補足しづらいと言う点はある。しかし、私からすればそれはまったく問題ないし、寧ろ遅い範疇だな。かの最速と言えるであろう槍兵と比べれば、視認できる時点で言わずもなだが、ならば。

「教える事はただ一つ…」

左右の刃を投擲する。

狙い違わず飛来する白と黒の軌跡は、それぞれ鳥人間達に牙を向き、防御させる暇も無くあっさりと切り裂く。

「
——ブローケン・ファンタズム
壊れた幻想」

呟きに反応して、両剣共に他の鳥人間達を巻き込んで爆散する。想定以上の魔力がこもっていた剣は、一瞬、強い光となって辺り一面を明るく照らし出した。

後に残るのは爆発により拓いた空間と、半ば消えかかっている元は鳥人間であつただろうモノ。消えていく様を見るに、実体があるわけではなく、やはり召喚されたものだということか。

「……と、まあこのように、相手の力量、手の内を読めなければ、最悪あなるという事だ」

手には再び夫婦の剣。驚きを助長するだけかもしれないが、別に構わない。あの程度の連中ならば、油断と呼ぶでもなくこれだけで十分だ。

手の内を晒しすぎたと思わなくも無いが、ちょっと遅めの自己紹介兼お披露目と言うことで納得しておこう。

さて、講義した内容を早速実践に移すでしょうか。

「分かったかね？」

「……あ、はい……」

茫然自失の体から漸く復活したらしい龍宮。どうやら、授業に込めた裏の意味にも気が付いたらしい。微かに伺える安堵の表情から察するに、仕掛けなくて良かったとも思っているのだろうか。ただかだか服を投影した程度で実力を測れなんて無理な話ではあるもの

の。

いずれにせよ、これで私がどういった存在か、少しは理解できるだろう。別に問い詰められ、襲われた所で本気で応戦するつもりは無かったが、少しは痛い目を見てもらうことになっていたかも知れないしな。

言わないが。

「宜しい、では始めようか。最早下がれとは言わないが… そうだな、まあ自分の身は守れるだろうし、無茶はしないでいてくれると助かる」

「……その代わり、後で話を聞かせてもらいますよ？」

「さて、そんな時間が残ればいいがな…」

とは言ったものの、当然、答える気などない。

そもそも、いくら味方だとは言え、そう簡単に手の内をさらすのは愚の骨頂だ。既に投影と壊れた幻想は見せた、これだけでも大盤振る舞いだというのに。それに、仮に話したとして果たして理解出来るだろうか、この世界の魔法とは根本的にシステムが違うものを一から理解するとなると、私の魔術だけでなく、そもそも魔術とは何かと言う所から話し始めなければなるまい。具体的に概要を説明する程度ならば兎も角。魔術は一応門外不出なのだ、弟子でもなければ教えられないとか言っていたな。

まあ、龍宮自身も理解しているのだろう。頬に苦笑を浮かべて鬼達の方を見ている。それが賢明だ。

「フ…どうせ、後で学園長に問い詰められますよ」

「…まったく。これでも着任初日になるのでね、出来れば早々にこんな事はしたくなかったのだが…」

苦笑の一つも漏れてしまうな。

先程の呆然とした様はどこへやら、不適に笑う様はどうにも緊張感に欠けているが…なるほど、落ち着きを取り戻したところか。

まあいい、これで私も少しは楽が出来そうなのだから――。

初授業？（後書き）

第四話、如何でしたでしょうか？

今回は話に起伏が欲しいなと思い、やや強引ながら戦闘を入れてみました。がしかし、本格的な戦闘は次回に持ち込みとなりそうです。後は、早くもアーチャー視点だけだと表現が厳しくなってきました、やはり無理はするものではないですね。色々ご意見ご感想、頂きたく思います。

最後に謝辞を。一纏めで申し訳ないのですが、感想を下さった皆様、そして読んで下さった方に変わらず最大限の感謝を。ありがとうございます。

本編へ追いつくのはまだ遠いですが、変わらずお付き合い頂けると幸いです。

腕試し（前書き）

お待ちせ致しました、『Fate/Another Magis
ter』第五話をお送りします。

腕試し

Interlude ???

吐く息のまだ白いこの時間、一日の始まりとは言えまだ人気の無い朝靄の中を私は走る。

肩から提げた鞆には常には無い大量の新聞。最早日課とも言えるかしら、新聞配達のアルバイト。とは言え、今日は事情があつて日課プラスアルファぐらいにはなっているけど。

普段なら終わっている量だけど、事情——休んだ人の分の配達の代わり——により、配る量と範囲が増えているのよね。

「あ、おはようーございまーす！」

「おう、ごくろうさん」

途中、すれ違った警察の人と挨拶を交わしつつ、尚駆ける。住宅街からそれで、やや閑散とした道。木々の多いこの道は、確か森の遊歩道へと続いてたかな？

毎日走る道とは違うからか、ちょっと新鮮さを感じるわ。

とはいえ、いつも以上に肩紐が食い込む感覚には慣れそうに無いわね。痛みは無いけど、バランスが取り辛くて走りにくい。

「とと……うーん、やっぱちょっと重かった」

呟いた所で思い出した。そう言えば、ちょっと前もこんな事が無かったかしら？

あれはそう、同じく新聞配達のアバイト中で、ネギの杖に乗り損ねた時だったかな。ちょうど今日みたいに配達が多くて困ってて、そ

れを助けてくれるって言うアイツが初めて魔法使いに見えたけど……杖は私が乗った途端動かなくなって、結局自分の足で走ったんだっけ……。

せつかく飛べるって思ったのに、ネギは私が重いだの何だのと……思い出すとちよつとム力つくわね。

「——おつと」

危ない危ない、ヘンに考えてたら配達する家を通り過ぎる所だったわ。

朝刊を一部、ポストに——

「——ん？」

その時、花火のような音がした。そこまで大きくは無かったけど、結構響いてきたから近いのかな。

方向は……森の方かしら？ こんな朝早くからまた迷惑な……って、森で花火とか……え、結構シャレにならないんじゃないの！？

「ちょ、火事とか勘弁してよね！」

だ、大丈夫なのかな？ 一応、見に行ったほうがいいわよね？

慌ててポストに朝刊をねじ込むんで、配達もそこに音の方向を勘で当たりをつけて、走り出す。緊急事態だし、残りの新聞は後で届ければいいよね。

「何処のどいつよ、傍迷惑な！」

なんか、前回の配達も遠回りしてネギとひと悶着起きたし、今回は今回でなにやら妙な事になっているし、縁でもあるのかしら？

木々の生い茂る道を曲がり、森林浴を売りにしてる遊歩道へ――

「――あ、う」

唐突に。

何の前触れも無く、ここから先には行きたくない、そんな気がしてきた。

「な、何……？」

ここまで来たのに、どういう事？ もう目と鼻の先なのに、何で行きたくないなんて――

I n t e r l u d e o u t

小さな鬼が振り下ろした金棒を莫耶で切り払い、空いた懷から切り上げるように干将を首へと走らせる。確かな手ごたえを感じると、後方へとバックステップで下がる。一瞬前まで私がいた場所を、別の金棒が決る。

鳥頭を殲滅して暫し、此方へと追いついた鬼達とついに戦闘へと入った。

寸前で結界が何かを張り巡らせたような、取り込まれたような魔力行使を感じられたが、目の前の存在達が行ったわけではなく、また現在特に何かが起きているという事でもない。疑問ではあるが流石にそちらへ対処する暇など割けず、放置するしかないか……被害が出る前に何とかしなければな。

「フツ――」

新たに接近してきた狐面の、旋棍のような物による突きを右に開いて躲し、そのまま反動で一回転して蹴り飛ばす。

そのまま、干将・莫耶を投擲しつつさらに跳躍して後退し、龍宮の背後に背中合わせに降り立つ。それぞれ二体の鬼を切り裂いた夫婦剣は、回転しつつ我が手に戻る。

「——まるで曲芸ですね」

「ふむ、そうかね？」

後ろから聞こえてきた落ち着きのある声は、余裕を感じさせる。彼女の腕は果たしてこんな人外どもに通用するのかと気を揉んだが、どうやら杞憂であつたらしい。

やはり初めの、只者ではないという印象は間違いではなかった。銃火器を使用しながらも接近戦で半分ほどを始末した彼女の腕は、大したものだろう。

周りを見れば、既に半分に満たないまでに数を減らされた鬼達。今になって漸く此方を警戒する気になったのか、まばらな数で取り囲んではいるものの襲い掛かつては来ない。

「そういう君こそ、拳銃で格闘戦とは驚かされる」

「フフ、撃つだけが能じゃありませんよ」

数的にはまだ不利ではあるが、力量差から軽口を叩く余裕ができ、思わず肩を竦めてしまう。

と、そういえば彼女は結界らしきものに気づいているのだろうか？ 余裕が出来た事だしな、何かしら情報なり解決手段なりを持ち合わせてはいないか尋ねてみるのも有りだな。

「——時に龍宮君、気付いているかね？」

「？ 何をです？」

「先程、こちらを囲むように何かの魔力行使があつたと思うのだが」
「…ああ、あれですか。問題ありませんね」

ふむ、やはり知っているのか？

「恐らく、学園長の仕業でしょう。人払いか認識阻害が知りませんが、結界を張ってこの場を隔離しようとしたのですよ。いつもの事です」

何気なく言う龍宮。

成る程、直接我々に効果を発動するのではなく、間接的に効果を及ぼす類の結界か。龍宮が言うには後で学長に問い詰められるらしいし、そのときにでも聞いてみるでしょう。

「そうか、なら構わないな。すぐに終わらせて直接聞くとしよう」
「それがいいですよ」

そろそろ焦れてきたのか、鬼達の動きが今にも飛び掛らんとするかの様に、距離を測るものへと変わる。

さて、すぐに終わらせるとは言ったものの、どうしたものか。学園長が此方に結界を張ったと言う事は、此方の事を把握しているのだろうし、あまり過剰に手の内を晒したくはない。たとえ把握されていなくても干将・莫耶については龍宮から情報が漏れる事はまず間違いないだろう。彼女自身も興味があるらしいな。

幸い、敵の数は最早少ない。このまま干将・莫耶のみで片をつけるのも手か。

「では、後ろ半分は任せる」

「仕事ですからね、請けましょう」

龍宮が頷くのを確認すると、前に並ぶ四体の内、一番手近な狐面に狙いを定めて地を蹴って接近し莫耶で切り上げる。どちらかと言えば防ぐ事を得意とする私の剣だが、攻撃手段としても大して遜色無く振るえるのは強みだろうか。

案の定、狐面は斬撃を右の旋棍で受け止め、仕返しとばかりに左で殴打してくる。そう早くない攻撃だが、それでも当たれば傷の一つや二つ、場所によっては致命傷にもなり得るだろう。あくまで当たればの話だが。

「はあっ！」

振り下ろされる旋棍を干将でいなし、空いた胴へ魔力で強化した膝による蹴りを放つ。軽々と吹き飛ぶ狐面を後目に、背後へと回っていた鬼へ逆手に持ち替えた莫耶を突き出した。

少しの抵抗と肉を断つ感触が確かな手ごたえとなって伝わる。引き抜けば、子鬼は金棒を振り上げたままの姿勢で倒れる。

それを目で追いつつ、休む間も無く後ろへと飛びつつ、両手の夫婦剣を再び投擲。それぞれ白と黒の軌跡を描く斬撃は着地を狙っていたのであろう小鬼二体をそれぞれ切り裂いて、我が手へと収まった。

「…こんなものか」

時間もそろそろ惜しいかと思い、あまり切り結ぶ事を考えずに攻めてはみたが、予想以上に上手くいった。龍宮の方も、見れば丁度最後の狐面に止めを刺した所だった。

鮮やかで躊躇いの無い止めは手馴れていて、ともすれば熟練の技を髣髴とさせる。

「おや、そちらも終わりましたか先生？」

「ああ、他に居なかった様だ、終わりだな」

つかつかと此方へ歩み寄る龍宮に頷き、辺りを見回すが、他に動く者も敵意や魔力の類も感じられない。第二波もあるかと思っていたが、やや拍子抜けだな。

面倒でないのは楽だが。

「あのような存在は頻繁に出現するのかね？」

「そうですね……普段はそうでもありませんが、最近は多いような気がします」

「むう……それほどまでに人外が多いのか……」

「ええ、召喚すればいくらでも。魔力と依り代さえあれば、喚べますから」

「成る程な……依り代も安くは無いだろうに……」

「そうですね？ たかが紙だから、こんなに多いのでは？」

「何？」

「……ああ、ありました、これですよ」

差し出された手には、ボロボロになった紙切れが一枚。破れかぶれで読めないが、梵字のような物が描かれているな。

なんとまあ、紙を依り代にしてもあのような実体化が出来るのか、魔術ではそう簡単にはいかんというのに、つくづくこの世界の魔法と言うものは良く分かん。

「遠隔操作も利きますし、何とも面倒ですよ。幸い能力は大した事はありませんが」

「そうか。しかし……使い様などいくらでもあろう？ 有効に使えばかなりの脅威になる」

どうりで術者が居ないわけだな。しかし…それならば何故こんな中途半端な数で攻めて来たのか、分からんな。少なくとも、これでは脅威になり得ない。

「そうですね… ああ、もしもし？ 学園長？」

龍宮は特に疑問も異論も無いらしく、携帯電話を取り出すところかへ電話をかける。相手は学長のようなうた。

二言、三言と遣り取りをした後、電話を此方へと差し出してくる。何だ？

「私にか？」

「ええ。学園長が代わって欲しいと」

「む…？」

早速尋問と言う事だろうか。仕方ないとは分かっているものの、面倒な事になりそうでやや嫌気が差す。

行動が早いのは良いことだが、受ける側としてはありがたくないな、これは。

しかし、予想に反して受話部分から聞こえる声は予想外にも険がなかった。

『おお、アーチャー君。丁度良い所に居てくれたものじゃな、君のおかげで助かったぞい』

「む？」

『龍宮君と協力して侵入者を撃退してくれたようで、すまんの』

「いや、それは構わないが…」

『初めの爆発には驚いたがの、認識障害と人払いはおいたから問題は無かるうて。バレなければ後はどうとでもなるわい』

「む…それは済まない。敵が多かったので纏めて排除しようとした

結果だ。木々が多かったので隠蔽は出来るだろうから排除が優先だと判断した。あれほど大きな爆発になるとは想定外だったが」

『うむ…ここは魔力が多いからのう。魔力行使に対する効果がおぬしの想像より高くなつたのじゃろう』

「…見ていたのか？」

『一応の。まあお主の……いや、うむ。こんな時間に鬼達が現れたのは驚いたものじゃが、無事に終わって良かった良かった。本当に、ありがとうの』

何だ？ 何かしら追求なり質問なりあるかと思つたが、礼だ？ 学長からすれば私はイレギュラーな存在だろうに…どういう意図だ？

此方に質問をしてくる訳でもなく、はぐらかそうとでも言うのだろうか。にしては、私の取つた行動について言及はしている…益々分からん。

「…どういう事だ？」

『あの鬼達かの？ いや、最近ちょっと仲の良くない集団から嫌がらせを受けていてのう。それで――』

「……」

学長が何やら言っているが、それを話半分で聞き流す。目下の関心は何故私を追及してこないか、だ。とは言え、その理由を知ろうにも学長は話題に触れこそすれ追求してくる事はないし、私から話すなんて問題外だ。墓穴を掘るような真似など、出来たものではない。

ならばどうするか…いつそ、流すか？

敢えて此方からは何もせず、向こうの出方を待つか。ふむ、ふとした思いつきだが、悪くない。後手に回るのは避けたかったが、現状で取れる手段は思いつかない以上、これしかないという事もある

が。

しかし、だとすると疑問が湧いてくる。これは問い詰めておかねばならないな。

『——つまり、こんな時間に騒ぎを起こす事で一般人に魔法の存在を暴かせ、スキャンダルとして握って我らより優位に立とうとしているのじゃよ』

「…なるほど、その“西”とやらの差し金であり、こんな朝早くから騒動を起こす原因は嫌がらせと勢力の失墜を狙ったの事だ？」

『うむ、いかにも』

「やれやれ、程度の低い事だ」

『じゃが、無視は出来んし面倒ではあるぞい。大方、成功すれば儲け物なのじゃろう』

「成る程な、賛成は出来んが理解はしよう。しかし……敢えて聞こう。何故、そんな事情を私に話す？」

これだけは聞いておかねばならない。下手をすれば身内の失策だろうに、それを部外者といつても差し支えない身である私に話すメリットは何だ？ 本来ならば私の事も含めて全て流せばそれで済む事だろう。にも拘らずわざわざ、何故か？

まあ、魂胆としては私の力を利用しようと言う所か、しかし、向こうも私に気付かれる事は承知だろう。内心は兎も角、それでも敢えて話すというのは理解に苦しむな。

『フオフオフオ、“敢えて”か。流石に要点は逃さんの。まあ……そうじゃな、言葉で飾った所で意味は無いかの。暴露すると……巻き込んでしまったし、君なら協力してくれるかと思つてな。後は、これが本音なのじゃが……こちらが腹を割って、君の印象が良くなれば、仲良くなれば万々歳かのう』

「……」

『もちろん受けるも断るも君次第じゃ。受けてくれると嬉しいが、強制する事は出来ん。恩を笠に着るのはわしらの主義に反するでの』

さて、どうしたものか。助けてくれた恩と、この都市の人を守るという意味では受けるのも吝かではない。しかし、ただでさえ組織に所属して重い身となっているのに、さらに組織に接近する事になるのは避けたい。学長があだし悪い人物ではないと思うのだが、組織と言うものである以上どうしても大きなモノを優先しがちになる。

かつての私ならば兎も角、今の私はもう一度『答え』を貫くと決めた身、小も捨てたくは無い。

ならば…所属しつつ自由を確保できるよう、折衷案でいこう。

「良かるう、協力しよう。ただ条件がある」

『ふむ、何かの？』

「協力するのは構わないが、あくまで私の意志によつてだ、気に入らなければ手を貸さないこともある。また、協力する際、示された行動方針は善処するが、私の独自判断で動く事も認めてもらおう」

『ふむう…それは実質、協力しないという事ではないかの？』

「そうでもないぞ。あのような人外を排除する程度ならば、企みも意志も関係あるまい。乗じて何か起こすというならば分らないがそれは逆にこの地に関わりの薄い私に任せては、色々拙いのではないかね？ そら、何も問題はない」

『む…ふむ……まあ、現状はそうじゃな。良かるう、そうしてくれるよう頼むぞい』

「了解した」

話を終え、龍宮に携帯を返す。こちらを興味深そうに見ていたが、問題あるまい。大して重要な話は無かった。

龍宮もそれは気付いているのだろっ、軽く言葉を交わすと電話を

切ったようだ。

「さて、では仕事も終わったし帰りましょう。あまり遅れると遅刻になる」

「む、そうだな。そうしよう。赴任初日から遅刻、それも教師である私がそんな事をしては示しがつかん」

頷き、龍宮の後を追って歩き出す。こうして見るとやはり、人払いの結界とやらはどの世界でも優秀らしい。現にあれだけの騒ぎを起こしても誰も…おや？

見れば、森林浴コースの入り口やや手前の所で、一人の少女が立ち尽くしている。左右の目の色が違う、特徴的な少女だな。これといった魔力は感じられないが…いや、無い訳でもないのか？

不思議なものだ…良く分からんな。

年の頃は…そうだな、龍宮のような事が無ければ、中学生から高校生までの間といったところか。当てにはならんが。

しかし、認識の阻害と人払いを受けつつ、この場に留まっているとなると、只者ではないようだな。

「……龍宮君、あれは魔法に関わる者か？」

「いえ、違いますが…」

龍宮も気付いているようで、足を止めて少女を見ている。と、少女も此方に気づいたのか、駆け寄ってきた。

知り合いか？ それにしても…ふむ、足が速いな。

「あれ、龍宮さん？ それに…ええと……うーん…どちら様？」

「……神楽坂明日菜、か」

いや、勢いよく来るのはかまわないが、初対面の相手が居るのだ

から少しは落ち着いたほうが良かるうに。

「……知り合いかね？」

「ええ、クラスメイトです」

「へ？ あ、つと…龍宮さんのクラスメイトの神楽坂明日奈です」

「ふむ…申し遅れた。今日から君のクラスの副担任になる、エミヤ

——エミヤ・A・シロウだ。アーチャー少し変わっているが…アーチャーと呼んでくれ。あだ名みたいな物でな、気に入っているんだ」

「あ、はい。宜しくお願いします、アーチャー先生」

「ああ、宜しくな。神楽坂君」

咄嗟に、自然にアーチャーと呼ばせる理由にミドルネームと言う形で名乗ってしまった。口籠った上にミドルネームで呼べなんておかしいと思われそうだが、どうやら少女——神楽坂は気にしていないようだ。後から付け足した理由で納得したのか？

兎も角、これで問題はない。第一印象も問題なかったろうし、クラスに溶け込む事は重要だからな。

だが、これが後々面倒な事態の引き金になっていた事を、今はまだ知る由も無かった——。

「ところで、神楽坂君？」

「あつ、はい。何ですか？」

「君は見た所、新聞を大量に持っているようだが…？」

「あ！？」

腕試し（後書き）

第五話、如何でしたでしょうか？

今回は前回の続きの戦闘と、新たなキャラの登場、視点転換の実験と、色々盛り込んでみました。

見づらくなっていたり、文が分かり辛くなっていないか心配です…。今回もまた、様々なご意見ご感想をお待ちしております。

最後に謝辞を。例によって一纏めで申し訳ないのですが、感想を下さった皆様、そして読んで下さった方に変わらず最大限の感謝を。ありがとうございます。

ついに次回で本編に追いつき、いよいよアーチャーの教師ライフが始まる。

……と思います。

是非ご一読下さい。

前途多難（前書き）

お待たせ致しました、『Fate/Another Magister』第六話をお送りします。

前途多難

朝の騒動の後、学長室に龍宮と出頭したのは良いが、結局何か問い詰められるといった事はなかった。やや拍子抜けではあったが、助かった事は間違いない。

龍宮は何か言いたい事があったようだが、学長から私について聞かされたことで一応納得はしたらしい。

その後は龍宮が退出し、入れ違いにやってきた他の教師達と簡単な打ち合わせをした所で朝のベルが鳴った。

この打ち合わせで色々と驚愕の自体が明らかになったのだが、それは追々明らかになるだろう。と言うより、今この場で思い出したく無いと言ふべきか。後々明らかになるとしても……。

そして今に至り、担任であるネギ君と受け持つクラスへとやってきて、HRが始まった筈のだが――さて、これはどういう状況だろうか。

「先生は何処から来たんですかー!？」

「その髪は地毛なのですか!？」

「日本語が上手なのはなんでー？」

「年はいくつなんやろー？」

「家は――？」

「――!？」

「――」

矢継ぎ早に繰り出される質問は、最早意味を捉えることができない程となっている。

それは、ネギ君とクラスのリーダー格か委員長か……一人の女生徒が収めようとしているが、全く効果を發揮していないようだ。

果たして、女性と言うものはここまで姦しいものだったろうか？

遠い記憶に思いを馳せてみるが、答えは出ない。かつての師にして主であった、『私』にとって最も影響を与えてくれた少女、剣を時には握り合い、時には剣を向け合った騎士王の少女、妹のように守るべきで、それでいて捨てるべきと苦渋の選択を迫られた少女……。

他にも、思いつく限りの女性を挙げてみるが、それでも目の前の者達ほど姦しくはなかったような気がする。いや、集まれば劣らず姦しくはなっただろうか？ そんな事があったような気もするし、無かったような気もする。

「みつ、皆さん落ち着いて下さ〜い！ アーチャーさん……いえ先生が困っているじゃないですかあ〜」

物思いに耽る私の横ではネギ君が必死に静止しようと奮闘しているが、効果は眼前を見れば明らかだな。まあ、こんな可愛らしい先生では仕方が無いというものか。

中には冷静にこちらを見ている者が……さて、既知の者を除いても何人かいるのはせめてもの救いだろうか。どの者も只者ではない雰囲気だが、ここは女史中等部で間違いないよな？

にしても、私自身、まさか龍宮や神楽坂だけでなく、エヴァに茶々丸と、出会った者すべてがここで会するとは思ひもしなかったが、それはエヴァや茶々丸からしても同じらしく、私が入室した際には“まさか”といった様子だったな。気配なり魔力なりを感じ取れば分かるものだろうが、やはり自分の目で見た驚きは勝るのだろうか？ 先程から疑問が尽きないな。

まあしかし、知り合いがいた事が救いとはいえ、女子しかないというこの状況……今朝言われて知ったのだが、つくづく認識が甘かったとしか言いようが無い。今更反論など無駄だろう。昨日ネギ君との他愛ないやり取りの際に寮が女子寮だというのは分かったが、まさかそれが布石になっていようとは、普通思っただろうか？

学長……いやあの狸め、分かっているでよくも……。

「うう……アーチャー先生も何とか言ってお下さい……」

呼ばれて視線を下げてみれば、今にも泣き出しそうなネギ君が此方を見上げている。いやまあ、分からなくはないが……担任の言う事を聞かない者に、新入りの副担任の、しかもこの喧騒の原因である私にそれが務まるとはとても思えないのだが？

そもそもを言えば、このような少年を教師として用いているこの学園に掛け合うべきだろう。自身の能力で不安なら他教師に助力を頼めばよいし、私が来るまでにそれをしていなかったのは怠慢だと思わなくも無い。

今朝話した限りでは、他のどの教師も私については学園長から聞いていたのか、特に問題が無かったのだ。話の分かる人物達なのであるうし、授業中ならば兎も角、HR中ならば協力を得られない事はないだろう。

……まあ、私のせいだと言われれば頷くしかなく、事実私のせいなのだろう。反論出来ないのが痛い所だ。

やれやれ、先が思いやられる。

「仕方ないな……静かにしたまえ！」

ネギ君に頷き、仕方なしにやや大きく、沈黙を得るために若干の苛立ちを威圧感として込めて声を上げる。やりすぎかと思わなくも無いが、注目を浴びさえすれば良いのだからこれで問題はないだろう。

案の定、あれほど騒いでいた面々はピタリと凪いだ水面のように静まり返った。

「……私に興味を持ってくれた事は光荣だ、初対面の私に対する君

達の興味も分かる。答えたいのは山々だがしかし、矢継ぎ早に質問されても困るし、そもそも今はHRの最中だ。暫し協力してくれると有り難い」

勿論それだけでは反発を生みかねないので、フォローの言葉は忘れない。後で煩くなる事は間違いないだろうが、休憩時間中ならば問題はあるまい。

……無い筈だ。

「……ありがとう。ではネギ先生、続きを」

「……」

「ネギ先生？」

「……え！？ あ、はい……」

暫し待って誰も口を開かない事を確認すると、硬直していたネギ君に先を促す。まさかとは思うが、君が威圧に反応していないだろうな？

「ええつと……と言う事で、アーチャー先生は副担任以外にも僕のまほ……っ、英語の授業補佐と、教科担当として社会学を引き受けてくれます」

これも今朝聞いた事だ。

イレギュラーな存在をイレギュラーに組み入れて、即日でこの対応とは恐れ入るが……見ず知らずの存在に仕事を任せ過ぎだと思わなくもない。

いや、仕事をくれた恩もあるのだ、やらない事はないがね？

さて、教育機関に労働組合のような物はあったかな……。

「——では、今朝の連絡は以上です。何か質問は——」

……む！？ 待てネギ君！！ それは――

「はいはい！ アーチャー先生の出身地は何処ですか！？」

「日本語が上手なのは日本にいたからですか――！？」

「年はいくつなんやろ――？」

「珍しい髪色は地毛ですか――！？」

「何か武術の心得はあるアルか――！？」

「社会学つて――！？」

「ちよつ！？ み、皆さん落ち着いて――」

「家は――？」

「――？」

「――！」

「――」

……やれやれ。子供にこういう配慮を求めるのも酷な話か――。

Interlude Evangeline

フン、慌てているばーやは兎も角、一言一言淡々と答えているアーチャーはどうにも気に入らん、見ていてつまらん。どれもあのじじい等と作ったカバーストーリーのように、聞く気も起きん。

昨日からかわれた時もそうだが、どうやらこういう事態にある程度の耐性があるらしいな、面白みの無い。それでいて皮肉交じりで此方をからかってくるなど……アレだな、アルビレオ・イマが明る

いやな奴だとすると、アーチャーは暗いいやな奴だな。
むう……マズいな、手に負えんぞ。

「……マスター」

「どうした、茶々丸？」

「アーチャー先生の事です……」

「ああ……ミドルネームとはな」

茶々丸の言わんとすることは分かる。

私達には“エミヤシロウ”と名乗ったのに対し、この場では“エミヤ・アーチャー・シロウ”と名乗った。アーチャーは別称のようなものだと言っていたが、では何故私達と生徒達で違う名乗り方をする？

アーチャー

“弓射る者”というのがミドルネームなのはどういう事だ？ 英

霊名はエミヤシロウではないのか？

……氣に入らん。偽りがあるということか？

後から後から疑問が湧いて出る。これは問い詰めるしかないか、まともな答えを返してくれるかは分らんが……構わんな、答えるまで聞いてやる。

「……茶々丸、行くぞ」

「はい、マスター」

ならば善は急げだ。幸い、一時間目の授業はアーチャーの出番は無い。私は元々授業に出る気など無いし、丁度いいだろう。

アーチャーは質問の波を潜り抜けたのか、未だに捕まっている様子を残して扉から退出しようとしているが、逃す気は無い。興味が何か、逸る気持ちを押さえつつ、茶々丸を連れて奴の後を追った――。

Interlude out

少女達の余りの勢いに一時はどうなるかと思ったが、一つ一つ答えるだけで済んだのは助かった。質問内容についても一部を除いてごくごく一般的な、事前に学長と想定していた内容を出ないものであり、黙秘と簡単な返事のみで答えることが出来た。

最大の杞憂は過ぎた事だ、後は檻褸を出さないように授業を過ごせば大過あるまい。

「おいアーチャー」

さて、私の授業は……ふむ、二時間目の英語の補佐からか。いきなり授業を受け持つ事にならなくて何よりだ。これであのクラスの雰囲気がかめればいいし、ネギ君の教師姿がどれ程のものか興味もある。場合によっては参考にもしよう。

「聞いているのか、アーチャー？」

……そういえば、職員室の机の上に必要な物は揃えてあったな。事前に授業内容を把握しておくとしてよう。かつて世界中を旅していた影響が様々な語学は修めたものだが、この身となって使わぬ間に錆付いていないか確認する必要もある。

「っ、ええい無視するな！」

「……どうしたマクダウエル君、何か質問かね？」

「……止める気持ち悪い。いちいち使い分けずに普通に呼べ」

やれやれ、にそのまま諦めてくれればいいものを……回り込まれては反応しない訳にはいかないではないか。

どうにも嫌な予感がするから避けたものを。後ろに茶々丸まで引き連れて、一体何か用だろうか？

「そうか。ではエヴァ、どうした？」

「……フン、先程の自己紹介の事だ」

自己紹介？ はて、何か問題があったのだろうか？

昨日既に私の事は話している。エヴァの事だ、今日話した私の素性が作り上げたものである事は気づいているだろう。何を言いたいのか分らん。

いや、その辺りで何か拙い事でもあったか？

「ふむ、何か問題が？」

「大有りだ……と言いたい所だが、興味の範囲とも言える。お前の呼び名、アーチャーがミドルネームとはどういう事だ？」

「む？」

ミドルネーム……ああ、“アーチャー”のクラス名をミドルネームとして名乗った事か。

「別に深い意味は無い。“アーチャー”の名を自然に呼ばせるにはどうすればいいかと思っただけだ」

「何だと？ “アーチャー弓射る者”とは貴様の別称ではないのか？ 大事な英霊名だろうに、それしきの事で気軽にミドルネームを混ぜて構わないのか？」

……？

そういえば、出会った時も説明する際にも聖杯戦争、ひいては英

霊の役割やクラスについては話していなかったか？

……ふむ、今更話す気は無いが、どうしたものか。

「アーチャー？」

「む？ ああ、済まない。そうだな……英霊名は教えた通りだよ。アーチャーの名は……そうだな。例えばエヴァ、君は真祖だ」

「そうだが、それがどうした？」

「長い時を生きた存在であり、今は兎も角、元々は強大な力を持っていたのだろう。二つ名の一つや二つ、あるのではないかね？」

「そうだな……私が知っている限りでも闇の福音、不死の魔法使い、ダイク・エヴァンジェルマカ・ノスフェラトゥ禍音かいんの使徒……挙げればキリが無いな。……そういう事か？」

「そうだ。それと同じようなものだよ。私の場合、英霊名はエミヤ、あるいはエミヤシロウであり、アーチャーの名は肩書きに過ぎん」

「成る程な。しかし、それならば何故その名を歪める？ 普通に名乗ればよからう？ 何故そんな面倒な事をする？」

「いや、そうでもない。単にアーチャーの名を気に入っている事、そう呼ばれたい事。そして……これは真面目な話だが、英霊名を知られては好ましくなくてな、それだけだ」

この地で聖杯戦争が起こる可能性は無いのだろうが、断言できるほど知っている訳ではなく、また他にも何が起こるか分からない。他の英霊達と違って、私の場合は正体を知られた所で弱点を知られる事や戦法が限られる可能性は少ないが、用心に越した事は無いだろう。しかし、名前から攻撃される事も、何か対策を立てられる事もないとは言い切れない。そうなつては面倒だ。

ならば、少しでも名前を歪めて存在を隠すのが上策だろう。

もう手遅れのような気がしないでもないが、せずよりはマシだと思いたい。

「だから、ああ名乗ったという事か。だが良いのか？ 私を含め、

何人かはお前の名を知っている。そこから流出するかも知れんぞ？」

「その時はその時だ。初めから対策を立てていなかった私の落ち度だ、文句は言わないさ。それに……」

「……それに？」

「ク……なに、君が初めに名乗ってくれたのでね。それを信じてみようというのは悪くないだろう？」

「む……」

言葉に詰まり、薄く頬を染めるエヴァ。いかん、らしくないことを言ってしまったか。

これは、笑われるのを覚悟しなければなるまいな……。

「ふ、ふん……まあいいだろう」

「む……？ いいのか」

「構わん。意図が知れば十分だ！」

「マスター、そんなに照れては」

「うつつ煩い、このポケロボがつ！」

「ああ……マスター。そんなに巻いては……」

……一体、何だと言うのだ。笑われるかと思えば、漫才を繰り広げるなどと、流石に理解できんぞ。

いまだ往來の少ない廊下とは言え、人の目が無い訳ではない。まして、先程からは熱烈な視線が注がれているのだが、気付いていないのだろうか？

現に今、一人の少女がずっと見つめて……む？

「へえ……面白いものが見れたな、スクープ頂きつと！」

「むっ、貴様は！？」

「いやー、そんな表情もするんだなあ、エヴァちゃん？ しかも、アーチャー先生と親しげだし……え、何？ もしかして知り合い？

ちょっとお姉さんとお話しない？ あ、勿論先生と茶々丸さんもね！」

現れたのは女性としても高い部類に入るであろう身長と、纏めているように纏まっていけない髪型の少女だ。

確か、渡されたクラス名簿に載っていたな。名前は……朝倉和美だったな。

その手に持ったデジカメとICレコーダーは何だ？ あまり良い予感がしないのだが……。

「何だ貴様は、私は話す事など無い。そのアーチャーとでも話せば良いだろう」

「いやいや、確かにそうなんだけど、先生は後でいくらでも機会がありそうだし、スクープとしては余り人と関わらないエヴァちゃんの方がいいし。この麻帆良のパパラッチ、朝倉和美様は逃さないよ！」

「フン、知るか！」

「ちよつと待った——！」

「何を——！」

一部不吉な発言があった気もするが、話から察するに、余り関わらない方が良い気がするな。エヴァには悪いが、朝倉の気が引かれているうちに退散するでしょう。

「……絡繰君。いや、エヴァに倣って茶々丸と呼ぶべきか？」

「どちらでも構いませんが、何でしょうか？」

「では、茶々丸。私は授業の前に確認しておきたい事があるから、職員室へと戻る」

「そうですね」

「ああ。だからエヴァには宜しく伝えてくれ」

「分かりました」

「では、失礼する」

「はい」

話している間もエヴァ達が喧々囂々と言いつているようだが、関わりにはなりたくない。先程の怒涛の質問で辟易しているのだ、その上で更に朝倉のインタビューなど御免だ。

ならば、素早く立ち去るに限る。

「……二人とも。仲が良い事は結構だが、授業の準備を忘れるな」

ある程度離れた上で、いまだ言い合う二人に声を掛け、そのまま立ち去る。

後ろで気が付いたらしいエヴァが私に何か叫んでいたが、それ以上は振り返ることなく職員室へと足を進めた――。

「――では、授業を始めましょう！ Lesson 3の続きからです
ね、テキストの――」

あの後、授業の予習をするうちに二時間目となり、ネギ君と共に授業を行うべく来た訳だが……これは、どうした事だろうか。

“Then sir Bedivere departed and went to the sword and lightly took it up, and so he went to the water's side; and there he bound the girdle about the

h i l t s , a n d t h r e w t h e s w o r d a s
f a r i n t o t h e w a t e r a s h e m i g h t .
”この文の文法ですが――”

授業は滞りなく進んでいる。数名欠席しているようだが、それに影響される事無く授業は進んでいる。誰一人私語に興じる事も無く、HRでの騒ぎが嘘のような静けさだ。視線も教師に一点に集中し、教師は流麗な発音と解説でもって知識を得んとする意欲に応える。その姿は“学び舎”としては理想の姿だろう。

……その視線の先の教師がネギ君であれば、だが。

「――と言う事で、a sの部分に注意しつつ、訳して下さい。では――」

「……すまない、少しいいかなネギ先生？」

「あ、はい？ どうしました、アーチャー先生？」

急に話しかけた私に対し、きょとした様で応えるネギ君。まさか、今のクラスの状態に全く気付いていないのか？

だとすると、熱心に授業をするのは良いが熱中しすぎるのも問題だぞ。少しはクラスの雰囲気察して――いや、教師とは言え子供、授業をこなす事で手一杯と言う事だろうか。

「ああ、先程から果たして勉強になっているのが疑問でな……」

「えっ？ それはどういう――あ」

「気付いたか。まあそういう事だ」

ネギ君から少女達に視点を移せば案の定だ、その場にいる者の殆どと目が合う。

辛うじて騒ぎ出す事は無いようだが、それも時間の問題だろう。きっかけ一つあれば朝の再現となるのは想像に難くない。というよ

り確実にそうなる断言できる。

何せ、何ともキラキラした目が私を射抜いているからな。しかも複数。

……どうしてこうなった？

「あ、あはは……仕方ないですよアーチャー先生。僕も赴任した時はそうでしたから……ははは……」

「そ、そうかね？」

取り繕うように笑うネギ君。だが、その笑みはどこか強張っている……その、なんだ、君も苦労しているのだな……。

「……そうですね、どうせ授業にならないのなら、この時間はアーチャー先生と親交を深める時間にしましょう！」

「何！？ それは先程のHRで——」

「いよっしゃーっ！！じゃあじゃあ、まずは私から！ さっきはエヴァちゃんにも逃げられたし！」

「何イー！ ちょっと待った朝倉、ブンヤばかりにいい思いはさせないよっ！ 次はこのパール様の番だよ！」

「——！！」

「——！？」

私の抗議も何のその、少女が出したとは思えない声量に掻き消される。

そして再現される朝の怒涛の質疑応答。

馬鹿な、朝の回答では足りないと言っても言っのか！？ 確かに、いくつか回答をばぐらかした物はあったが……にしてもこの勢いは尋常ではないぞ！

「……まあ、諦めてください。アーチャー先生もそのうち慣れますよ……」

「……そうか」

ネギ君、気休めにと気を使ってくれるのはありがたいが……全く嬉しくないぞ？

全く、赴任一日目からこの様子では、先が思い遣られるな――。

前途多難（後書き）

第六話、如何でしたでしょうか？

今回でいよいよアーチャーの教師生活が始まったのですが……正直、苦戦しました。

といいますのも、コメディ表現が難しく、上手く表現できているかが果てしなく不安です。今回は特にアドバイスが頂きたいところです。

今回も最後になりましたが謝辞を。例によって一纏めで申し訳ないのですが、感想を下さった皆様、そして読んで下さった方に変わらず最大限の感謝を。ありがとうございます。

次回からは……図書館島編に入れるかどうかと言ったところでしょうか。アーチャーが本編にどう関わるのか、お楽しみにして頂ければと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4591i/>

Fate/Another Magister

2010年10月9日14時04分発行